

第3章 建康の山水庭園と自然に対する知識人の視点

はしがき

東晋南朝の都・建康は、西に長江、南に秦淮河が流れ、北には玄武湖、東には燕雀湖を有し、城内にも、青溪や潮溝、運瀆などの水路が通る、水に囲まれた都市である。また、植物の成長に十分な雨量があり、石頭山、鷄籠山、覆舟山、鍾山や雨花台など、城市周辺に丘陵が多いことから生態系に富んだ、景観に恵まれた都市であったといえる。

自然の山や水に囲まれた都市であると同時に、建康には、豊かな水系と植生を活かした人工の山水庭園も数多く存在した。

当時、「園」とは、陵や畑、庭等の意味を有していた。特に「庭」の意味をもつ「園」は、『宋書』巻71、徐湛之（1844頁）に、

貴戚豪家、産業甚厚。室宇園池、貴遊莫及。伎楽之妙、冠絶一時。

身分が高く勢力のある一族で、産業が豊かだった。邸宅や園池は、上流のなかでも及ぶものはなかった。伎楽の出来栄は、当時最も優れていた。

とあり、また、『宋書』巻77、顔師伯（1995頁）に、

多納貨賄、家産豊積、伎妾声乐、尽天下之选、園池第宅、冠絶当時、驕奢淫恣、為衣冠所嫉。

多くの賄賂を納め、家の産業は豊かで、妓女音楽は厳選され、園池や邸宅は当時最も優れており、驕り贅沢で我がまま勝手な様子は、身分の高い人々の嫉むところとなった。

とあり、また、『宋書』巻94、阮佃夫（2314頁）に、

宅舍園池、諸王邸第莫及。妓女数十、芸貌冠絶当時、金玉錦繡之飾、宮掖不逮也。

住まいや園池は、諸王の邸宅も及ばなかった。数十の妓女は、芸も容姿も当時最も優れており、金玉錦繡の豪華な装飾は宮廷も及ばなかった。

とあるように、園池は、邸宅、妓女音楽等と組み合わせ、富豪たちが競って贅を凝らす分野のひとつとなっていた。しかし、『陳書』巻30、陸瓊（397頁）に、

瓊性謙儉、不自封植、雖位望日隆、而執志愈下。園池室宇、無所改作、車馬衣服、不尚鮮華。

陸瓊は、謙虚で儉約につとめる性格で、財物を集めることをせず、名望は日々高まったが、志を守ってますます謙遜した。園池や住居は、改めて造営することなく、車馬衣服も華美なものとは好まなかった。

とあるように、必ずしも贅沢なものではなく、質素な園池も存在した。すなわち、園池は、居宅や車馬、衣服と同様に、趣向や贅の凝らしかたは、所有者の性質によって様々であり、当時の流行や世相といった社会的背景を反映したものであったのである。

東晋南朝の建康にみられる個人的な庭園についての研究には、盧海鳴の「六朝建康的私

家園林」¹がある。ここで、盧海鳴は、建康には 30 ほどの私家園林が史料上確認でき、園中には、池、果樹、假山（築山）、建築物が普遍的に見られることを指摘し、園の施主である官僚士大夫の隠逸的山林への憧れと高度な文化的素養がその造園に影響を与えているとする。

また、周維権は、『中国古典園林史』²のなかで、魏晋南北朝期を園林の発展史における転換期として位置づけ、造園方法は写実と写意が結合したものとなり、単純に自然の山水を模倣した造園から、自然のイメージを概括的または抽出的にまとめた造園へと変化したと指摘している。

本章では、東晋南朝の建康においてみられる山水庭園の造営について述べる。

第 1 節 知識人の山川に対する一視点と建康の山水庭園

建康に都を遷したばかりの頃、南渡してきた西晋の官人たちが建康城周辺に望める、山と河川のある眺望について抱いた印象に関して、『世説新語』言語第二、121（上、121 頁³）には、

過江諸人、每至美日、輒相邀新亭、藉卉飲宴。周侯中坐、而歎曰、風景不殊、正自有山河之異。皆相視流淚。

江南の地に移ってきた人々は、うららかな日になると連れだって新亭へ出かけ、草の上で酒盛りをした。周侯（周顛、269 - 322）は、酒宴の半ばで嘆いて言った。「風の色、日の光は同じようだが、まさしく山河は違っている」。皆顔を見合わせて涙を流した。とある。東晋南朝において、大きく展開した山水観の出発点のひとつは、このような故郷を失った悲哀や諦観と、洛陽への思慕にあったといえる。

そもそも、自然風物に自らの心情を投影して詠う表現法は、西晋以前から存在した⁴。例えば、『文選』巻 23、王粲（177 - 217）の「七哀詩」其二には、

荆蛮非我郷、何為久滞淫。 荆州は故郷でもないのに、なぜ久しく留まっていることができようか。

方舟溯大江、日暮愁我心。 舟を並べて長江を遡り、夕暮れは心を愁いさせる。

山崗有余暎、巖阿増重陰。 山は夕陽の余光があるが、谷は陰を増す。

狐狸馳赴穴、飛鳥翔故林。 狐狸は穴に戻り、飛鳥も林に帰る。

流波激清響、猴猿臨岸吟。 流波は清響をたて、猴猿は岸に臨んで吼える。

迅風払裳袂、白露霑衣衿。 迅風は裳袂を払い、白露は衿を湿らせる。

独夜不能寝、攝衣起撫琴。 独夜に眠れず、衣を払って起き琴を弾く。

絲桐感人情、為我發悲音。 琴は人の情を感じて、私の為に悲音を発する。

羈旅無終極、憂思壯難任⁵。 旅人に終わりなく、深く心が痛み耐え難い。

とあり、『文選』巻 26、陸機（261 - 303）の「赴洛道中作二首」其二には、

遠遊越山川、山川修且広。 遠遊して山川を越え、山川は長く広く続く。

振策陟崇丘、案轡遵平莽。	鞭を振るい高い丘をわたり、手綱を緩め平原を進む。
夕息抱影寢、朝徂銜思往。	夕に休むに影を抱いて眠り、朝に出発するに愁いを抱いて行く。
頓轡倚嵩巖、側聽悲風響。	手綱を置いて高い岩に寄り、悲風の響きを聴く。
清露墜素輝、明月一何朗。	清露は白い光を落とし、明月はなぜこんなに明るいのか。

撫几不能寢、振衣独長想⁶。 机に寄りかかり眠れず、衣を払い独り長く愁う。

とある。王粲は、後漢末の官人で、建安文学を飾った代表的な士である建安七子の一人としても有名である。陸機は、西晋の官人で、同時代の潘岳（247 - 300）とともに、文学者として名高い。

王粲の詩は、長安を戦乱によって追われ、都から遠く離れた荊州において作られたものである。また、陸機の詩は、始め呉に仕官していた呉郡出身の陸機が、祖国の滅亡のため、晋に仕官することとなり、そのため、洛陽に赴く道中において作ったものである。どちらの詩も、戦乱によって国を追われ、故郷から遠く離れてしまった悲しみや愁いを詠っており、北方民族の侵入による混乱を避けて、西晋の都であった洛陽を離れ、江南の建康へ移ってきた西晋の有力一族の悲哀と共通した境遇のもと作られた作品といえる。

前に引用した、新亭の酒宴に参加した「過江諸人」とは、文学的教養をそなえた西晋の知識人たちであり、王粲や陸機の詩を知らないはずはない。また、王粲の詩では「余暎」や「迅風」、陸機の詩では「風響」や「明月」と詠い、「風」と「ひかり」を自然風物として表現している点でも、新亭の酒宴における「風景不殊、正自有山河之異」と共通している。「過江諸人」は、前掲の王粲や陸機の詩を一般教養として知っていたからこそ、それを洛陽の都を離れて南渡してきた自分たちの境遇と重ね合わせ、周顛の言葉に顔を見合わせて涙を流したのであろう。

山・川・月・風といった自然の情景に心情を映して詠うことは、中原における伝統的な詩の表現方法のひとつであり、自然の情景を文字によって再現することもまた知識人たちにとって、心情をうったえる有効な手段であった。このような文化を有して、南遷してきた西晋の知識人たちが、江南の山水風景に注目するのは当然といえる。

以上のことから、南遷してきた西晋の知識人は、戦乱によって祖国を離れ、故郷から遠く離れた地に移ってきた、という事実のもと、その悲哀を表現するために、山川や風・ひかりといった自然の風物を詳細に観察する視点を、南渡当初から有していたのだと考えられる。

これらのことを踏まえ、以下、皇帝や知識人が建康とその周辺に造営した、山水をモチーフとした特徴的な庭園について、述べる。

1 華林園

台城内外の園林には、洛陽と同名のものが多数存在する。華林園もそのひとつである。東晋南朝の華林園は、台城の北に位置し、もとは呉の旧苑であった。そこに、東晋・宋・齊・梁・陳の歴代王朝が造営を加え、六朝を通じて皇帝の園林として重要な役割を果たしていた。華林園を文化的な側面から論じた研究としては、村上嘉実「六朝の庭園」⁷がある。村上は、皇帝が近臣と遊宴する、芸術的な観賞のための場であったと指摘している。一方、戸川貴行は「東晋南朝の建康における華林園について—「詔獄」を中心としてみた—」⁸の中で、華林園の機能について、「詔獄」を通じて皇帝権力の安定や拡大を目指す場であったとしている。

華林園のプランは、『建康実録』巻 12、太祖文皇帝、元嘉 23 年条（中華書局版、444 頁）に、

按地輿志、（中略）宋元嘉二十二年重修広之。又築景陽、武壯諸山、鑿池名天淵、造景陽樓以通天觀。至孝武大明中、紫雲出景陽樓、因改為景雲樓。又造琴堂、東有双樹連理、又改為連玉堂。又造靈曜前後殿、又造芳香堂、日觀台。元嘉中、築蔬圃、又築景陽東嶺、又造光華殿、設射棚。又立鳳光殿、醴泉堂、花萼池、又造一柱台、層城觀、興光殿。梁武又造重閣、上名重雲殿、下名興光殿、及朝日、明月之樓、登之階道、遶樓九轉。自吳晋宋齊梁陳六代、互有構造、尽古今之妙。陳永初中、更造聽訟殿。天嘉三年、又作臨政殿。其山川制置、多是宋將作大匠張永所作。

地輿志を按ずるに、（中略）宋の元嘉 22 年（445）、華林園に再び手を加え、これを広くした。また、景陽・武壯諸山を築き、池を掘って天淵池と名づけ、景陽樓と通天觀を造った。劉宋の孝武帝の大明年間（457 - 464）に、紫雲が景陽樓に現れたので景雲樓と改称した。また、琴堂を造った。東に双樹連理が生えていたため、連玉堂と改称した。また、靈曜前後殿と芳香堂・日觀台を造った。元嘉年間（424 - 453）に、蔬園と景陽東嶺を築き、光華殿を造り、射棚（土を築き、弓矢を射るための的をかけた武芸鍛錬のための設備）を設けた。また、鳳光殿・醴泉堂・花萼池、一柱台・層城觀・興光殿を造った。梁の武帝（在位 502 - 549）は、重閣を造り、上層を重雲殿、下層を興光殿と名づけた。朝日樓と明月樓を造り、これを登るための階段は樓の周囲を九転させた。呉から晋・宋・齊・梁・陳までの六代、それぞれの構造を用い、古今の妙を極めた。陳の永初年間（永定（557 - 559）の誤りか）、更に聽訟殿を造った。天嘉 3 年（562）、また臨政殿を造った。華林園の山川の配置の多くは、劉宋の將作大匠であった張永が設計した。

とあるように、六朝を通じて造営が加えられ技術と意匠の妙を極めた、山と池と、それらを高みから望むための樓閣や宮殿から構成される庭園だったようである。また、華林園の山水の基本的な構図を設計したという張永（410 - 475）は、呉郡呉県の人で、父は東晋末から宋にかけての官人であった張茂度である。張永は、大明中（457 - 464）にも、將作大匠として明堂や宣貴妃殷氏の廟を建設している。『陳書』巻 2、高祖本紀（36 頁）に、

（永定二年三月）乙卯、高祖幸後堂聽訟。還於橋上觀山水、賦詩示群臣。

永定2年(558)3月乙卯、高祖(武帝、在位557-559)は後堂に行幸して聴訟した。還るときに橋の上で、山水をながめ、詩を賦して群臣に示した。

とあることから、詩の内容は明らかではないものの、張永が設計した華林園の山水は、高所から眺め詩を賦すことのできる景観的にまとめられた山水風景を有していたことがわかる。

華林園は、先行研究が指摘するように公的な園林であったが、それと同時に皇帝にとっての私的な空間でもあった。『世説新語』言語第二、61(上、157頁)に、

簡文入華林園、顧謂左右曰、会心処、不必在遠。翳然林水、便自有濠濮間想也。不覺鳥獸禽魚、自来親人。

簡文帝(503-551、在位549-551)は華林園に入り、ふりかえって左右のものに言った。「心になつた所は必ずしも遠くにあるわけではない。このほの暗い林や流れにも、おのずと濠水や濮水の上のような思いがあるのだ。鳥や獣や魚までも知らぬまにおのずと来て人に親しんでいる。」

とある。簡文帝は、梁の第二代皇帝で、侯景の乱(548-549)の後、侯景に擁立されて帝位についた傀儡の皇帝であった。濠水・濮水は、安徽省の河川の名で、『莊子』秋水篇にある、莊子が楚王の招きを断って両水のほとりで自適な生活を送ったという故事に基づいている。簡文帝は、華林園の山水を濠水や濮水に例え、宮城に隣接した庭園に居ながら、逍遙とした超俗的空間を想起した。

一方、華林園の山水庭園を超俗的空間としてではなく、俗世間的空間として造営した例もある。『宋書』卷4、少帝本紀(66頁)には、

時帝於華林園為列肆、親自酤売。又開瀆聚土、以象破岡埭、与左右引船唱呼、以為歡樂。

時に少帝(406-424、在位422-424)は、華林園で店舗を並べ、自ら酒を売った。また水路を開き土を盛って、破岡埭を模し、近臣とともに船を引いて声高く呼びあい、にぎやかに楽しんだ。

とある。破岡埭は、六朝時代の運輸に重要な役割を果たした運河である破岡瀆に設置された人工の斜面で、埭とは、人力によって舟を綱で引き上げたり滑り下ろしたりする設備である。この記事は、皇帝の放蕩を非難する意味合いが強いが、建康の秦淮河沿いの繁華街の賑わい⁹や、破岡埭の活気に満ちた庶民の社会生活のなかに魅力を見出し、それを華林園という私的園林の中に再現したことは注目すべき点であろう¹⁰。六朝における山水の開拓は、荘園の開発や、荘園で得た産物を運搬するための運河や道路の整備と深い関連がある。有力者が山水に注目し荘園を経営したことによって、山や河川における民衆の活動も重要性和活気を増し、有力者たちの目を引くようになったのだと考えられる¹¹。簡文帝は華林園の山水のなかに超俗的な雰囲気をも、少帝は大衆的な股賑の楽しみをそれぞれ発見し、外界とは隔絶された空間を個人的に楽しんでいたのだといえる。

2 水系沿いの山水庭園

建康周辺には、高官や、僧・隠逸をはじめとする有力な知識人たちが集まっており、彼らの居住する空間には、私的な庭園が造営された。

河原武敏の研究¹²によれば、当時の園林は、魏の文帝（187 - 226、在 220 - 226）が洛陽に造った芳林園（のち華林園と改称）に始まる、池と築山から構成されるものであった。「穿池」は、『宋書』巻 67、謝靈運（1772 頁）に、

穿池植援、種竹樹藁。

池を掘って植物を育み、竹や藁を植えた。

とあるように、単に景観をよくするためだけでなく、果樹草木を栽培するためにも必要であった。

また、造営された池は、敷地内に水を引き貯水しておくことで、風流のためだけでなく、自給・自衛の役割を果たしていたと考えられる¹³。

青溪（清溪、青谿）は、鍾山を水源として建康の東側を台城と平行して南に流れ、秦淮河に合流する河川である。秦淮河と合流した南側には、烏衣巷とよばれる地域があり、ここは、南渡してきた西晋の名族たちが集中して居住する区域でもあった¹⁴。青溪沿いにも、高官が邸宅を並べており、宗室を始め¹⁵、檀道成（- 436）や朱异（483 - 549）、江總（519 - 594）など高官の宅があった。

『梁書』巻 22、太祖五王、南平王偉伝（348 頁）には、

齊世、青溪宮改為芳林苑、天監初、賜偉為第、偉又加穿築、増植嘉樹珍果、窮極雕麗、每与賓客遊其中、命從事中郎蕭子範為之記。梁世藩邸之盛、無以過焉。

齊のとき、青溪宮を改めて芳林苑とし、天監（502 - 519）初、蕭偉に下賜して邸宅とし、蕭偉は再び池を掘り山を築き、珍しい果樹を増植し、建築は華麗な彫刻を極め、賓客とその内に遊ぶたびに、從事中郎の蕭子範に命じて記述させた。梁の時代、諸王の邸宅のなかで蕭偉を超えるものはなかった。

とある。蕭偉（476 - 533）は、梁の武帝蕭衍（464 - 549、在位 502 - 549）の弟で、文人や知識人を優遇した。齊の時代に芳林苑と改名された青溪宮は、齊の太祖高帝蕭道成（427 - 482、在位 479 - 482）の旧宅である¹⁶。これを下賜された蕭偉は、さらに池を掘ったり山を築いたりする造営を加え、高名な文人、知識人たちの交流の場としたのである。『梁書』巻 38、朱异（540 頁）にも、

异及諸子自潮溝列宅至青溪、其中有台池翫好、每暇日与賓客遊焉。

朱异およびその諸子は、潮溝から邸宅を並べること青溪まで至り、その内に台や池を設けて楽しみ、暇日のたびに賓客とともに遊んだ。

とあり、梁の高官であった朱异（483 - 549）とその諸子が、潮溝から青溪まで宅を連ね、台と池の庭園を造って賓客を招いていたことがわかる。また、『建康実録』巻 20、陳下、孫瑒（802 - 803 頁）にも、

瑒兄弟篤睦、性通泰、有財皆散之親友。居處奢豪、宅在青溪東大路北、西臨青溪、溪西即江總宅。瑒家庭穿築、極林泉之致、歌童舞女、當世罕儔、賓客填門、軒車不絕。

孫瑒（516 - 587）は兄弟とも仲睦まじく、大らかな性格で、財物は皆親類や友人のために使ってしまった。住居は豪華で、邸宅は青溪の東大路の北にあり、西側は青溪に臨み、青溪の西には江總（519 - 594）の宅があった。孫瑒は家の庭に、池を掘ったり山を築いたりして、林泉の趣きを極め、歌童舞女の優れていることは当時類をみず、賓客は門をうめ、軒車は絶えることがなかった。

とあり、青溪沿いの高官の邸宅には、山水庭園が造営され、賓客が出入りしていた様子が窺われる。当時の高官たちは、建康の東から南側の地区に庭園を兼ね備えた邸宅を有し、相互に行き来していたと考えられる。さらに、『建康実録』巻 20、陳下、孫瑒（802 - 803 頁）には、先の記事に続けて、

及出鎮郢州、乃合十余船為一大舫、於中立池亭、植芰荷、良辰美景、賓僚畢集、泛長江置淥酒、亦一代之勝賞。

地方に出て郢州に鎮すると、十あまりの船を合わせて大きな舫を造り、中に池や亭を設け、菱や荷を植えた。良い時節と美しい景色の頃には、幕賓がみな集まり、長江に舫を浮かべ淥酒を置くことは、当時を代表する美しい景観だった。

とあることから、当時の高官は、建康だけでなく、地方の都市においても、同様の趣きの造営を行い、有力者を集めていたことがわかる。また、山水庭園の造園に関して、『南史』巻 25、到彦之附漑伝（679 頁）に、

漑第居近淮水、齋前山池有奇礪石、長一丈六尺、帝戲与賭之、并礼記一部、漑並輸焉。未進、帝謂朱异曰「卿謂到漑所輸可以送未」。斂板对曰「臣既事君、安敢失礼」。帝大笑、其見親愛如此。石即迎置華林園宴殿前。移石之日、都下傾城縦觀、所謂到公石也。到漑（477 - 548）の邸宅は、秦淮河の近くにあり、齋の前の山池には、珍奇な礪石があり、その長さは一丈六尺あった。武帝は、到漑と礪石と礼記一部を賭けて遊戯し、到漑はすべて負けてしまった。礪石と礼記一部が進上されないので、武帝が朱异に「届けるべき賭けの品が未だ来ない、と到漑に伝えるように」と言った。これに対して到漑はうやうやしく礼を行い、「私は陛下に事えているのに、なぜ礼を失することがあろうか」と言った。武帝は大いに笑い、到漑に対する親愛はこのようであった。礪石は、華林園の宴殿の前に置かれた。礪石を移す日には、都中の人々が思いのまま見に集まった。この礪石が、いわゆる到公石である。

とあるように、齋戒や修身養性のための「齋」と呼ばれる建物を設け、また、趣のある珍しい石を庭園に配置することを好む価値観があり、このような石自体が、価値有るものとして人々の興味の対象となっていたことがわかる。『景定建康志』巻 22、城闕志三、園苑にも、

古元圃。齊文惠太子性頗奢麗、宮内多雕飾精綺、過於王宮。開拓元圃与台城北塹等。其樓觀塔宇、多聚奇石、妙極山水。慮上望見、乃傍列修竹、内施高障、造游墻數百間。

古の元圃苑。齊の文惠太子は奢って派手な性格であり、宮内の精巧で美しい装飾は、王宮にも勝っていた。元圃苑と台城北塹などを造営した。その楼閣、観、塔、家屋や、珍しい石を多く集めた様子は、山水を極めた素晴しさだった。皇帝の目にふれることを恐れて、そばに長い竹を並べ、内には高い衝立を設け、数百間にわって囲いを造った。

とあるように、「奇石」の配置は、「楼観塔宇」の建築物とともに、当時の山水庭園の造営においてすでに定着していたようである。このような庭石について、李樹華「中国における庭石と盆石の鑑賞法の形成・定着およびその応用について」¹⁷によれば、石を積み重ねて神仙思想にもとづく三神山（蓬萊、方丈、瀛州）を模すことにはじまり、怪石を独立して庭園の中に飾るようになり、文人の隠逸文化の形成と発展にしたがって、ひとつの庭石のなかに大山の景観を見出すようになった、とある。これらの「奇石」の役割は、山水庭園を眺めた際、実際の峻巖な山水を彷彿とさせるようなスカイラインを形成することにあつたと思われる。

以上、建康においてみられる比較的大規模な山水庭園の特徴として、①居住用の邸宅に付随して造営されること、②水系の付近に位置し、水を引いて池を造ること、③築山を造ること、④風景観賞用の高層の建物を有すること、⑤用途別の独立した建物を庭園内に配置すること、⑥趣のある石を配置すること、⑦賓客を集め、知識人たちの交流の場とすること、が挙げられる。

3 「小園」について

南朝においては、前節で述べたような比較的規模の大きい山水庭園とは別に、個人的な、小規模な庭園も存在した。

『梁書』巻 25、徐勉（384 頁）には、

中年聊於東田間營小園者、非在播芸、以要利入、正欲穿池種樹、少寄情賞。又以郊際閑曠、終可為宅、儻獲懸車致事、實欲歌哭於斯。

しばらくして、東田のあたりに造営した小園は、農芸のためではなく、利益を求めるものでもなく、真に池を掘り樹木を植えて、情緒をかたむけるためのものである。また、郊外にあるため静かで広々としており、終のすみかとすべきである。もし官職を退くことができれば、ここで感情のまま過ごしたい。

とある。徐勉（466 - 535）は、梁武帝に信任され、位は中書令に至ったが、産業を営まず蓄財することがなかったため、家は貧しかったという。「東田」は、『梁書』巻 13 の同時代の沈約（441 - 513）の伝（236 頁）に、

約性不飲酒、少嗜欲、雖時遇隆重、而居處儉素。立宅東田、矚望郊阜。

沈約は、酒を飲まず寡欲で、大いに重んじられたときでも質素儉約であった。東田に宅を建て、郊外の丘陵を眺めた。

とあり、借景に山を配することができ、また、都市とは一線を画した俗的でない土地柄であったようである。沈約の「郊居賦」に、「不慕権於城市（都市における権勢を慕わず）」（『梁書』巻13、沈約、238頁）とあるように、郊外のすまいには、城市とは対照的な、隠逸的な風情があったと考えられる。『陳書』巻19、裴忌（317頁）には、その父裴之平について、

（裴之平）世祖即位、除光禄大夫、慈訓宮衛尉、竝不就、乃築山穿池、植以卉木、居処其中、有終焉之志。

裴之平は、世祖（文帝）が即位すると、光禄大夫、慈訓宮衛尉に除されたが、どちらにも就かず、山を築き池を掘り花樹を植えて、その内に住み、隠居する思いを持った。

とあり、『陳書』巻23、儒林、張譏（444頁）に、

譏性恬静、不求榮利、常慕閑逸、所居宅營山池、植花果、講周易老莊而教授焉。

張譏は安らかな性格で、榮譽や利益を求めず、常に閑逸を慕い、住居には山池を造営して、花や果樹を植え、周易や老莊を講じ、教授した。

とある。裴之平（-566）は、梁元帝の承聖年間（552-555）に、散騎常侍、右衛將軍・晋陵郡太守を歴任した官人であったが、陳の文帝が559年に即位すると、官職に就かず隠居した。張譏（514-589）は、陳の宣帝（在位568-582）のとき、建安王府記室參軍や東宮學士などの官職に就いた儒学者である。どちらの居宅にも、山水庭園が造営されたが、これらは隠居の志や閑逸的な目的で設けられた空間である。

以上のように、建康周辺には、都市とは一線を画した、簡素な隠逸的情緒を重視した山水庭園も誕生した¹⁸。

第2節 山水庭園における「山」「水」「光」「風」について

建康における山水庭園を構成する人工的な要素として、「築山」「池」「建築物」が挙げられることは、前に述べた。これらから構成される山水庭園の、景観及び雰囲気としての風景について、東晋南朝における華林園にみられる名称に基づき、考察してみたい。

『建康実録』の元嘉23年、華林園を造営した際の記事には、以下のような名称の「築山」と「池」と「建築物」が見られる¹⁹。（括弧内には、完成したと考えられる時期を示した。）

築山—景陽山（元嘉22または23（445または446）年）、武壯山（元嘉22または23年）、景陽東嶺（元嘉中（424-453））

池—天淵池（元嘉22または23年）、花萼池（元嘉中）

建築—景陽楼（元嘉22または23年、大明中（457-464）景雲楼に改称）、通天觀（元嘉22または23年）、琴堂（元嘉22または23年、後連玉堂に改称）、靈曜前後殿（元嘉22または23年）、芳香堂（元嘉22または23年）、日觀台（元嘉22または23年）、光華殿（元嘉中）、鳳光殿（元嘉中）、醴泉堂（元嘉中）、一柱台（元嘉中）、層城觀（元嘉中）、興光殿（元嘉中）、重雲殿（梁武帝時（502-549）、

興光殿と重閣構造、上層部)、朝日楼(梁武帝時)、明月楼(梁武帝時)、聽訟殿(永定中(557-559)か)、臨政殿(天嘉中(560-566))

以上の名称を系統別に分類してみると、特徴的なもので、以前の洛陽の都に存在した施設等に由来するものとして「景陽山」「景陽楼」「天淵池」「興光殿」、皇帝の威光や自然の光を表すものとして「光華殿」「鳳光殿」「朝日楼」「明月楼」、高さを表すものとして「日観台」(「日観」は泰山の頂の東巖の名)、「層城観」(「層城」は崑崙山の最も高い所)、「重雲殿」を挙げることができる。この他、蓮などの花を植えたと考えられる「花萼池」、軍事的な射棚(土を築き、弓矢を射るための的をかけた武芸鍛錬のための設備)、政務を行う「聽訟殿」や「臨政殿」が置かれた。

一方、梁の武帝のとき湘東王(第4代皇帝元帝、508-555、在位551-554)が台城内に造営した「湘東苑」について、『説郛』巻17下、渚宮故事、湘東苑に、

湘東王於子城中造湘東苑、穿池構山、長数百丈。植蓮浦、縁岸雜以奇木。其上有通波閣、跨水為之。南有芙蓉堂、東有禊飲堂、堂後有隱士亭。亭北有正武堂、堂前有射棚、馬埒。其西有鄉射堂、堂置行棚、可得移動。東南有連理堂。堂柰生連理。太清初生此連理、當時以為湘東踐祚之瑞。北有映月亭、修竹堂、臨水齋。齋前有高山、山有石洞、潛行宛委二百余步。山上有陽雲楼、極高峻、遠近皆見。北有臨風亭、明月楼、顔之推詩云「屢陪明月宴」。

湘東王は子城の中に湘東苑を造営し、池を掘り山を築くこと、長さ数百丈であった。蓮蒲を栽培し、岸边には奇木を植えた。その上には通波閣があり、水を跨ぐように設計されていた。南には芙蓉堂、東には禊飲堂、堂の後ろには隱士亭があった。隱士亭の北には正武堂があり、堂の前には射棚(土を築き、弓矢を射るための的をかけた武芸鍛錬のための設備)と馬埒(馬場)があった。その西には鄉射堂があり、堂には行棚が設置されており、移動させることができた。東南には連理堂があり、堂の柰(からなし)の木には連理が生えていた。太清(547-549)初、この連理が生え、当時これを湘東王の踐祚の瑞祥とした。北には映月亭と修竹堂と臨水齋があった。齋前には高山があり、山には石洞があり、屈んで二百余歩潜って行くことができた。山の上には陽雲楼があり、極めて高く、遠近すべて見渡せた。北には臨風亭と明月楼があった。

顔之推(531-591)は、「しばしば明月宴にお供した」と言う。

とある²⁰。人工の山と池を有する山水庭園であること、瑞祥が見られること、軍事用の施設があること、高さ眺望を誇る「陽雲楼」や、自然の光を表す「映月亭」「明月楼」などの建築物がある点において、華林園と共通している。

また、『陳書』巻7、皇后、張貴妃(132頁)には、後主陳叔宝(在位582-589)が、貴妃張麗華(-589)や貴嬪らの居処として造営した宮殿について、

至德二年、乃於光照殿前起臨春、結綺、望仙三閣。閣高数丈、竝数十間。(中略)每微風暫至、香聞数里、朝日初照、光暎後庭。其下積石為山、引水為池、植以奇樹、雜

以花藥。

至徳二年（584年）、光照殿の前に臨春・結綺・望仙の三閣を建てた。閣の高さは数丈、みな数十間あった。（中略）微風が吹いてくるとに香りは数里に広がり、朝日が照ると光が後庭に映った。その下に石を積んで山を築き、水を引いて池を造り、珍しい木を植え、その中に花や藥草を植えた。

とある。ここでも、山水庭園であること、高い建築物があること、光を表す「光照殿」があることなどが華林園や湘東苑と共通している。また、風、香、光（「朝日初照」）の要素が庭園内に見られ、華林園の「芳香堂」「朝日楼」や湘東苑の「臨風亭」を彷彿とさせる。

以上のことから、南朝における山水庭園では、山、水辺、花や樹木、日光や月光から構成される眺望と、香りや風がもたらす芳しい空気、それらを楽しむための見晴らしのよい、あるいは、外気に面した建築物が重視されていたと考えられる。

『南史』巻20、謝弘微附謝莊伝（557頁）にも、

五子、颺、朏、顥、從、【草かんむりに淪】、世謂莊名子以風月景山水。

五人の子は、颺、朏、顥、從、【草かんむりに淪】という。世間の人は、謝莊（421 - 466）は、風、月、景、山、水を用いて子に名づけた、と言った。

とある。当時の自然風景を構成する風物として、風、月の光、日の光、山、水は、特別な位置を占めていたのではないだろうか。

『南史』巻52、南平元襄王偉附恭伝（1293頁）には、

時元帝居蕃、頗事声誉、勤心著述、后酒未嘗妄進。恭每從容謂曰「下官歴観時人、多有不好歛興、乃仰眠牀上、看屋梁而著書、千秋万歳、誰伝此者。勞神苦思、竟不成名。豈如臨清風、対朗月、登山泛水、肆意酣歌也」。

時に元帝（508 - 555、在位551 - 554）は、蕃に居し、名声があり、著述に心力を尽くしていたため、酒も分を越えて進上しなかった。蕭恭は、勧めるたびに次のように言った。「私は当世の人々見てきているが、多くの人が歡樂を好まず、寝台で仰臥して家屋の梁を見て著述する。しかし、千秋万歳も、誰がこの著述を伝えてくれるだろうか。精神を勞し苦心しても、結局名を成さない。清風に臨み、明月に対し、山に登り水辺に浮かび、自由気ままに酒を飲んで楽しみ歌うことには及ばない」。

とある。蕭恭は、前述した「芳林園」を造営した蕭偉（476 - 533）の子である。ここでも、風、月の光、山、水が歡樂の要素として表現されており、当時の知識人が、自然風景中の趣きの本質的要素として重視していたことがうかがわれる。

第3節 会稽・廬山の山水と建康の山水

最後に、東晋南朝における会稽や廬山にみられる「山水」（山と水のある環境とそこでの人間の活動全般）と、建康においてみられる「山水」とを比較してみたい。

会稽は、『宋書』巻93、隱逸、戴顥（2276頁）に、

会稽剡県多名山、故世居剡下。(中略) 桐廬県又多名山、兄弟復共游之、因留居止。

会稽郡剡県は名山が多いので、代々剡県に住んでいた。(中略) 桐廬県もまた名山がおおく、(兄の勃と) たびたび兄弟でともにここで遊び、留まった。

とあり、また『旧唐書』巻 166、元稹 (4336 頁)、

在郡二年、改授越州刺史、兼御史大夫、浙東觀察使。会稽山水奇秀、稹所辟幕職、皆当時文士、而鏡湖、秦望之遊、月三四焉。

(元稹 (779 - 831) は) 郡にいること 2 年にして、改めて越州刺史、御史大夫、浙東觀察使に任ぜられた。会稽の山水は奇秀であり、元稹が徴招した幕僚はみな当時の文人であったので、鏡湖や秦望山に遊ぶこと、月に三、四度であった。

とあり、また、『宋書』巻 67、謝靈運 (1754 頁) には、

靈運父祖並葬始寧県、并有故宅及墅、遂移籍会稽、修宮別業、傍山帶江、尽幽居之美。与隱士王弘之、孔淳之等縱放為娛、有終焉之志。每有一詩至都邑、貴賤莫不競写、宿昔之間、士庶皆徧、遠近欽慕、名動京師。

謝靈運 (385 - 433) は、父祖みな始寧県に葬られており、また旧宅や墅を有していたため、会稽に本籍を移し、別荘を営み、山に添い長江の水をめぐらし、幽居の美を尽くした。隱士の王弘之 (365 - 427) や孔淳之 (372 - 430) らとともに勝手気ままに楽しみ、ここに隱居する意志を持った。ひとつ詩を作って都市にもたらされるたび、身分の高いものもそうでないものも競ってこれを写し、一晚のうちに士庶みな広く行き渡り、遠近慕い、評判は京都を動かした。

とあるように、会稽は、自然の雄大な山水に恵まれた土地で、建康場内に比べ、より自然の山や河川を利用した動的な造園が可能で、また、文人に好まれる山や水のある景色や雰囲気を楽しむことができた。美しい山水と、莊園の経営に適した土地柄、建康からの交通の便の良さの点から、高名な文人が会稽を訪れ、山水の価値は、効率的に大きな都市や建康へ伝えられた。

また、廬山は『高僧伝』巻 6、義解 3、晋廬山釈慧遠に、

遠創造精舎、洞尽山美、却負香爐之峯、傍帶瀑布之壑、仍石壘基、即松栽構、清泉環階、白雲満室。

釈慧遠 (334 - 416) は、精舎を創建するのに、山の美を極め、香爐峰を負い、瀑布の壑に沿い、石を積み重ねて基礎とし、松を植え、清泉は階のまわりをめぐり、白雲は室に満ちた。

とあり、廬山もまた天然の山と溪谷の美に恵まれていた。さらに、釈慧遠を中心とする仏教結社があり、当時の有名な隱逸や文人が、廬山に集まっていた。

会稽や廬山の山水の美しさが知識人たちによって伝えられ、都市においても、自然の山水の美が好まれたが、会稽や廬山の天然の山水を活かした造園と比較すると、建康の山水庭園は、地勢や面積にも制限があるため、そのまま邸宅内に会稽や廬山のような山水を再現することは難しい。そのため、建康に見られる山水庭園は、前述したように、自然のな

かから、山のスカイラインや水辺の光景、照る光、清々しい空気などの「山水らしさ」を抽出した、ある程度形式化されたまとまりを持ち、それに加えて、隠逸的な精神性、もしくは富を誇るような修飾が重視された。

建康における小園や庭石の配置による造園法、また、山水詩や山水を題材とした絵画の流行には、自然の山水の再現に対する都市内部における空間的な制約が影響していると考えられる。

むすび

建康に移ってきた西晋の知識人の、山水をはじめとする自然風物に対する視点は、故郷を失った悲哀や愁いを表現するため、南渡してきた当初から有していたものであった。知識人の持つ山水をはじめとする自然風物を情緒的に観察する視点は、山水に対する新しい見方を生み、山水庭園の造営の表現法に影響を及ぼした。

山水庭園は、華林園やそれに準ずるような大規模なものであれ、個人的な「小園」であれ、当時の文人が楽しむために自然を模して造営されたものであった。その造営の中には、「山」「水」「光」「風」が風景の要素として組み込まれており、風流や歓楽のためにも、これらと親しむことのできる環境は重要視されていたと考えられる。

同時に、風景の中にその趣きの本質的要素として、「山」「水」「光」「風」を見出したことによって、都市内部の限られた空間内や、仮想的な詩文の中、また画幅の上²¹においても、天然の山水をより審美的に表現することができるようになったといえる。

注

- 1 盧海鳴「六朝建康的私家園林」、『東南文化』114、1996年、92 - 94頁。
- 2 周維権『中国古典園林史（第二版）』、北京：清華大学出版社、1999年、「第三章 園林的転折期—魏、晋、南北朝」、81 - 120頁。
- 3 目加田誠『世説新語上・中・下（新釈漢文大系 76・77・78）』、東京：明治書院、上 1975年、中 1976年、下 1978年。
- 4 佐伯雅宣は「六朝の行旅詩—旅夜の変遷—」（『中国中世文学研究』61、2012年、17 - 32頁）のなかで、王粲や陸機、陶淵明や謝靈運らの詩を例にあげ、旅の夜について詠った詩が、旅の苦難や別離の悲しみを詠ったものから、旅情を多角的に詠う詩へと変化したことを指摘する。
- 5 花房英樹『文選 詩騷編三』（全釈漢文大系 28）、東京：集英社、1974年、391 - 394頁。以下、『文選』の本文と訳は、同書を引用、参照した。
- 6 同上、724 - 726頁。
- 7 村上嘉実「六朝の庭園」、『古代学』4 - 1、41 - 60頁、1955年。（同『六朝思想史研究』第五章第二節、平楽寺書店、1974年に所収）。
- 8 戸川貴行「東晋南朝の建康における華林園について—「詔獄」を中心としてみた—」、『東

洋文化研究』15号、33 - 57頁、2013年。

9 『文選』巻5、劉淵林注吳都賦に「長干延屬、飛甍舛互。横塘在淮水南、近家渚、縁江築長堤、謂之横塘。(中略)建業南五里有山崗、其間平地、吏民雜居。東長干中有大長干、小長干、皆相連。大長干在越城東、小長干在越城西、地有長短、故号大小長干」とある。

10 都市周辺の民衆の社会生活の真似をして楽しむ遊びの場は、少帝のほかにも皇族たちによって、私的園林の中に設けられた。『晋書』巻64、会稽文孝王道子(1734頁)には、「牙為道子開東第、築山穿池、列樹竹木、功用鉅萬。道子使宮人為酒肆、沽売於水側、与親昵乘船就之飲宴、以為笑樂」とあり、また、『南齊書』巻7、東昏侯本紀、永元三年(501年)条(104頁)には、「三年夏、於闕武堂起芳楽苑、山石皆塗以五采、跨池水立紫閣諸樓觀、壁上画男女私製之像。種好樹美竹、天時盛暑、未及経日、便就萎枯。於是徵求民家、望樹便取、毀徹牆屋以移致之、朝栽暮拔、道路相繼、花葉雜草、亦復皆然。又於苑中立市、太官每旦進酒肉雜肴、使宮人屠酤、潘氏為市令、帝為市魁、執罰、争者就潘氏決判」とある。同様の東昏侯の記事は、『建康実録』巻15、齊上、廢帝東昏侯(505頁)に「又立紫閣諸樓、壁上画男女私製之像。種好樹美竹、徵求民家、望樹便取、朝栽暮拔、道路相繼。又于宮中立市、太官乃朝進酒肉肴果、使宮人闍豎、共為神販、潘妃為市令、帝為市魁、將鬪者修潘氏判決。苑中作土山、築渠立堰」とある。

11 Piero Camporesi, *Le belle contrade: nascita del paesaggio italiano*,

Milano: Garzanti, 1992 (ピエーロ・カンポレージ著、中山悦子訳『風景の誕生—イタリアの美しき里—』東京: 筑摩書房、1997年)、風景と人の営み(215 - 226頁)によれば、14 - 16世紀のイタリアにおいては、風景の歴史と労働の歴史とは密接な関連があり、自然と人の営みの融合から風景が生み出された。

12 河原武敏「海を渡った園林」『しにか』2、1994年、22 - 28頁。

13 『宋書』巻77、沈慶之(1998頁)に「慶之連營山下、營中開門相通、又命諸軍各穿池於營内、朝夕不外汲、兼以防蛮之火」とあり、「穿池」は、生活用水の貯水と防火の役割も果たした。

14 『景定建康志』巻16、疆域志二、街巷「烏衣巷。在秦淮南。晋南渡、王、謝諸名族居此、時謂其子弟為烏衣諸郎。今城南長干寺北有小巷、曰烏衣。去朱雀橋不遠」。

15 『景定建康志』巻42、風土志一、第宅「齊武帝旧宅。在青谿。今城東一里。臨秦淮是其地」。

16 『景定建康志』巻22、城闕志三、園苑「古芳林苑。案寰宇記、一名桃花園。本齊高帝旧宅。在古湘宮寺前巷。近青溪中橋」。

17 田中淡編『中国技術史の研究』(京都: 京都大学人文科学研究所、1998年)141 - 172頁に所収。

18 外村中は、「北周の庾信と南朝建康の東宮の園林および『小園賦』について」(『ランドスケープ研究』65 - 4、2002年、334 - 344頁)において、庾信(513 - 581)は、南朝から北朝に移ったのち、長安の居宅に小さな山と池を有する「小園」を造営し、それを、周囲とは異なる次元に存在する居住空間のごとく、「小園賦」の中で表現している、と指摘する。

19 『建康実録』巻12、太祖文皇帝、元嘉23年条(444頁)、本文は、第一節「華林園」で引用。

20 『太平御覽』巻196、居処24、苑囿にも同様の文章があり、

『渚宮故事』云、湘東王於子城中造湘東苑、穿池構山、長数百丈。植蓮蒲、縁岸雜以奇木。其上有通波閣、跨水、為之。南有芙蓉堂、東有禊飲堂、堂後有隱士亭。北有正武堂、堂前有射棚、馬埒。其西有鄉射堂、堂安行棚、可得移動。東南有連理、太清初生此連理、當時以為湘東踐祚之瑞。北有映月亭、修竹堂、臨水齋。前有高山、山有洞石、潛行宛委二百余步。山上有陽雲樓、極高峻、遠近皆見。北有臨風亭、明月樓、顔之推云「屢陪明月宴」。とある。『渚宮旧事』(唐・余知古撰)五巻には、湘東苑に関する記事は見られない。

21 『南史』巻44、齊武帝諸子、竟陵文宣王子良附賁伝(1106頁)には、「幼好学、有文才、

能書善画、於扇上図山水、咫尺之内、便覺万里為遥。」とある。蕭賁（齊武帝の子である子良（460 - 494）の孫、梁の官人）は、扇の上に山水図をえがき、ごく狭い紙面のなかに、遙かな風景をえがきだした。

第4章 廬山の山水と知識人 —劉宋建国期の白蓮社を中心に—

はしがき

『宋書』巻93、隱逸伝には「山水を好む（好山水）」という表現が多く、また隱逸が山で過ごしたという記述も多い（本論87頁「表 『宋書』巻93、隱逸伝掲載の人物と山における活動」参照）。そのなかでも、現在の江西省九江市にある廬山は、多くの隱逸が親しんだ山といえよう。その山水の景観の美しさや塵界を離れた雰囲気は、とくに当時の隱逸に好まれ、また高く評価された。

東晋南朝時代の前半は、中国における山水文化史のなかで注目される重要な時期である。李亮「山水隱逸与資生適性—以謝靈運中心」¹や盧海鳴「六朝建康的私家園林」²では、六朝時代を山水意識が高まり、中国における山水文化が発展した重要な時期であると位置づける。

しかし、この時期の隱逸は官人など知識人の間における山水意識の高まりは、正史に書かれているような単なる隱逸的精神に基づくものであるのだろうか。韋鳳娟「魏晋的莊園經濟与山水詩的興起」³では、会稽山の山水を例にあげて、山水詩の発生が、会稽山の莊園を利用した社会經濟の変化に起因するものであるとしている。

先にあげた李亮の論文のなかでも、東晋から劉宋にかけての高官であった謝靈運の、山水との関わりを考察し、その山水の莊園的な性格から、山水における精神世界と世俗社会の関係について、精神の超越と文化の創造は、現実世界と無関係には存在せず、山水文化が、決して一般的な風流の感性からの産物ではなかったことを指摘している。謝靈運の園や苑のあった会稽山の山水と經濟とのつながりを述べているものである⁴。

山水と經濟とのつながりは、もともと謝氏が、莊園經營が可能な有力一族であったことを基盤としているのだろうが、しかし、隱逸伝に登場する人物でも家系が地方の有力者であったと思われるものが少なくない。謝靈運と隱逸との間には、官職についていたか否かという大きな違いはあるが、謝靈運にも隱逸の風は十分に見られ、山水を經濟的価値のあるものとしてではなく、超俗的な当時の文人らしく精神的な風流の観点から表現している。謝靈運にとっての山水と隱逸にとっての山水に根本的な相違があったとは考えにくい。

このような隱逸といわれた人々が好んだ山水にも、謝靈運と同様の山水、つまり精神や文化のみにとどまらない、実質的な意味を持つ山水と同じ役割があったのではないだろうか。さらに、山水は、知識人や官人も多く訪れる交流の場であったから、經濟的な役割のほかに、政治的な意味合いを持っていたことが考えられる。

山水の實際的な役割を示す先行研究として、大室幹雄『園林都市—中世中国の世界像』⁵が挙げられる。ここでは、南朝の首都である建康を「自然に向かって開いた都市」であったとし、隱逸の住む山水を、「都市内部の園林、郊外の別荘にひとしく、せいぜいのところ相対的により多く野趣に満ちた庭園」と表現し、山水が都市の機能の一部であったことを

指摘している。

『宋書』巻 93、隱逸伝にたびたびあらわれ、隱逸が多く好んだ山である廬山には、劉宋建国当時、釈慧遠（334-416）を中心として白蓮社という仏教結社が形成された。ここには、結社当時、僧だけでなくさまざまな知識人、官人などの有力者が関わり、とくに山水と政治とのつながりがうかがわれる。山水をめぐる文化史のなかで重要とされるこの時期、史料上に多く登場し、政治・経済・軍事・文化等、多岐の分野にわたって重要視されたと考えられる山水である廬山の性質を明らかにすることは、後代に続く山水をめぐる文化を理解していくうえで重要である。

本章では、『宋書』巻 93、隱逸伝のなかに登場する山水からとくに廬山をとりあげて、廬山の有力な集団である白蓮社と政治権力との関わりから、当時廬山の山水が政治との関連の中で、どのような役割を果たしたか考察していく。

第 1 節 廬山白蓮社の隱逸

1 廬山と白蓮社

廬山は、「九江之鎮」「南国之徳鎮」と称され、また、神仙にまつわる説話も伝えられる山で、景観が美しく、気候が温和なことで知られる山である。『水経注』巻 39、廬江水に、
其山川明浄、風沢清曠、気爽節和、土沃民逸。嘉遯之士、繼響窟巖。竜潜鳳采之賢、往者忘帰矣。

その山川は明るく清らかで、風沢の景色は清く広大で、気は爽やかで節が穏やかであり、土は肥沃で民は安らかに暮らしている。隱逸の士は、響を陰しい山のいわやに継ぐ。竜潜、鳳采の賢人（才能に満ちた優れた人）は、行く者は帰るのを忘れてしまう。とあり、環境が比較的よく景色に優れ、また隱逸の山としても有名であった。

雁門楼煩の賈氏であった釈慧遠（337 - 412）は、381 年（東晋孝武帝、太元 6 年）、数十人の弟子とともに尋陽に至り、この廬山に精舎（竜泉精舎）を建てた。竜泉精舎の東には、当時の刺史桓伊が神運という刹を建て、慧遠のために東林寺を造った。また別に禅室や龕塔淡彩の図写、石に刻まれた五つの銘が造られた。この銘に対しては、江州太守孟懷玉のような官人や、隱逸である宗炳などの知識人が賦を作っていることから、釈慧遠の寺は、政治的な権力者や近辺の知識人とのかかわりもあったことがうかがえる。

また、釈慧遠と同門の慧永も、慧遠と同様に廬山に拠っていた。当時江州の刺史であった陶範は、慧永のために西林寺を造った⁶。『蓮社高賢伝』（叢書集成初編、中華書局、1991 年、6 頁）慧永法師伝には、

鎮南將軍何無忌鎮尋陽、至虎溪、請遠公及師。遠公持名望、徒徒百余。高言華論、举止可觀。師納衣半脛、荷錫捉鉢、松下飄然而至。無忌謂衆曰、永公清散之風、乃多於遠師也。

鎮南將軍何無忌は尋陽に鎮し、虎溪に至り、積慧遠と慧永をたずねた。慧遠は名望があり、弟子を百余り従えていた。高く優れた言葉や見事な論で、举止も立派だった。慧永は、袈裟は粗末であり、錫杖を背負い鉢を持ち、松の下に飄然と至った。何無忌は衆に「慧永は心にわだかまりが無く、世事にとらわれない様子は、慧遠よりも上である」と言った。

とある。ここから、慧遠、慧永は尋陽のあたりでは名を知られた存在であり、当時の清議の主題のひとつでもあった人物評価の対象となっていたことがわかる。また、官人によって建てられた東林と西林の二寺は、彼らの廬山での地位と、官人や政治との関わりを象徴しているといえよう。江州の治所であった尋陽に滞在する官人や、高名な知識人で廬山の白蓮社を訪ねる者は多く、江州における慧遠らの影響力の大きさがうかがえる。

積慧遠が白蓮社を結成するころには、「衆を率いること百二十三人に至る」⁷とあるから、この地域ではかなり大規模で、有名な社会的集団であったといえるだろう。また、白蓮社は規模だけでなく、社会に与える影響も小さくなかった。

盧循（-411年）は、東晋末に孫恩のあとを受けて民衆を率い、大規模な反乱を起こした人物である。この大反乱の間、盧循は廬山に入り慧遠を訪ねた。目的は不明だが、長江沿いに反乱を進めた盧循にとって、廬山で力のあった白蓮社の協力を得たいところがあったのかもしれない。積慧遠は、盧循の父とも知り合いであったので、仏教の思想に従って、人を選ぶことをせず「国寇」であった盧循と会うことを避けなかった。そのため、劉裕がこの反乱を鎮圧した後、劉裕の側近たちは、積慧遠を盧循と親交のあった人物として警戒した。『蓮社高賢伝』慧遠法師伝（3頁）に、

盧循擲江州。入山詣師。師少与循父遐、同為書生。及見循、歛然道旧。其徒諫曰、循為国寇。得不為人疑。師曰、我仏法中、情無取舍。識者自能察之。此何足懼。及宋武進討循、設帳桑尾。左右曰、遠公素主廬山、与循交厚。宋武曰、遠公世表之大、何可疑也。

盧循は、江州を拠点とした。廬山に入り、慧遠を尋ねた。慧遠は、若いとき盧循の父の遐と共に書生となった。盧循に会うと、喜んで昔の話をした。慧遠の弟子が諫めて、「盧循は国寇である。人に疑われるようなことをすべきではない」と言った。慧遠は、「私は仏法の中におり、心情は、取捨することはしない。識者はこのことを察してくれるだろう。恐れるに足らない」と言った。宋の武帝は盧循を討ち、桑尾（江西省九江県の東北の砂洲）に陣幕を設けた。左右のものは「慧遠はもとより廬山の主であり、盧循との交際も厚かった」と言った。武帝は「慧遠は浮世の外の人である。どうして疑うことができようか」と言った。

とあり、積慧遠が廬山の中心的人物であり、劉裕らにも注目されていたことがわかる。

また、積慧遠のような人物がいたことで、廬山を文化的に他の土地と切り離し、単なる風光明媚な一地方の山というだけでなく、特別な意味合いをもつ土地として、廬山が当時の知識人に認識され得たといえよう。

正史中の隠逸伝では、廬山は、俗世間との関わりが無いという意味の上での隠逸の山として扱われているが、実際の廬山は、世間の知識人や官人と密接な関わりを持ち、有力な知識人が集まるとう点において、他の土地よりも文化的に優越した土地だったと考えられる。白蓮社結社当時、釈慧遠の周辺には、先述の江州太守孟懷玉や、別駕王喬之、常侍張野、晋安太守殷隱、黄門毛修之、主簿殷蔚、参軍王穆夜、考廉范悦之、隠士宗炳などの官人、知識人が集まった。

そして、彼らによって廬山が都市へ紹介されることで、廬山の景観美、自然の豊かさは審美的に評価され、都市の間で、風致の土地としてイメージづけられるようになったと考えられる。

2 宗炳

宗炳は、『宋書』『南史』の隠逸伝に伝があり、南陽郡涅陽県の人である。『宋書』の記載によれば、375年（東晋孝武帝、寧康3年）に生まれ、443年（劉宋文帝、元嘉20年）に没した。祖の宗承は宜都太守であり、父の宗繇は湘郷令で、宗氏の中では宗炳の従父弟の宗彧之、孫の宗測⁸、宗尚之⁹にも隠逸の風が見られる。また母の師氏も宗氏と同じく南陽の出身で、宗炳の外弟にあたる師覺授¹⁰にも素業があったという。

これは、宗氏一族が隠逸の思想を持つ家柄であったというよりも、宗承のころからうけついでと考えられる、その土地における家業が比較的豊かであり、必ずしも仕官する必要性が無かったということを示していると思われる。

宗炳の母である師氏も出身地である南陽においては、宗氏と同程度の家柄であったと考えられ¹¹、師氏の中にも師覺授のような人物がいることも、宗氏の場合と同じように、仕官することの他に家業を持つ家柄であったことを示すものであろう。

宗炳はまず、郷里において名声を得、その後荊州刺史の殷仲堪、桓玄らによって、主簿や秀才に挙げられた。その後劉裕が荊州を領したとき、また主簿に徴せられたが就かず、この時宗炳は「丘に棲み谷川の水を飲むこと三十余年」と答えたことから、能動的であれ受動的であれ、隠逸という立場や地位はすでに確立していたと考えられる。

この後、宗炳は廬山の僧である釈慧遠についた。釈慧遠は、廬山に白蓮社という仏教結社を形成しており、付近の知識人（隠逸伝に挙げられる人物も多く含む）たちとの交流も盛んで、仏教のみの教養にとどまらない学問的な集団であったことがうかがわれる。一方で宗炳は、広く学問的な関連というだけでなく、より仏教的に深く関わっていたことが知られる。宋陳舜俞『廬山記』巻2・絺山北¹²に、

遠公与慧永、慧持、曇順、曇恒、竺道生、慧叡、道敬、道昞、曇詵、白衣張野、宗炳、劉遺民、張詮、周統之、雷次宗、梵僧仏馱耶舍、仏馱跋陀羅。十八人者、同修浄土之法、因号白蓮社十八賢。

遠公と慧永、慧持、曇順、曇恒、竺道生、慧叡、道敬、道昞、曇詵、白衣張野、宗炳、

劉遺民、張詮、周統之、雷次宗、梵僧仏駄耶舎、仏駄跋陀羅の十八人は同様に浄土の法を修めた。そこで白蓮社十八賢と号した。

とあり、このうち、劉遺民、周統之、雷次宗は宗炳とともに、『宋書』『南史』の隱逸伝にあげられている人物であることから、隱逸と白蓮社の関係がうかがわれる。

このように宗炳が白蓮社に深入りすることを避けるためか、宗炳の兄であり、当時南平太守だった宗蔵は、宗炳を廬山から連れもどし、江陵の三湖に宅を建てここに住まわせることで、宗炳に「閑居無事（静かで平穩な生活）」を得さしめた¹³。このころ、また劉裕によって太尉參軍に徴されたが、就かなかつた。

宗炳には二人の兄がおり、ともにやくに没した。この「二兄」も前述の宗蔵同様に官職についていたと考えられるが、この「二兄」がいなくなってしまったことから、一族で農業を営んだとある。このことに対して、劉裕はたびたび食物を送ったが、その後、宗氏一族の子弟が官職に就くことになったため、劉裕からの贈り物を受け取らなくなった。

これ以前に劉裕が開府時に下した書には、

高祖開府辟召、下書曰、(中略)南陽宗炳、雁門周統之、並植操幽棲、無悶巾褐、可下辟召、以礼屈之。

高祖は、府を開き辟召して、書を下して言った。(中略)南陽の宗炳、雁門の周統之は、どちらも主義を俗世から離れた静かな境地におき、貧苦を気にしない。朝廷に召すべきであり、礼をもってかれらを従わせよ。

とあり(『宋書』卷 93、隱逸、宗炳、2278 頁)、宗炳や周統之(後述)を徴する価値が、明確にその隱逸的性格にあったことが述べられている。前述の通り、宗氏の子弟が官職につくようになったことから、宗炳は劉裕からの贈り物を受けなくなった。これは、政治権力から遊離しようという隱逸らしい行動であるが、政治権力から与えられた隱逸としての立場を通すことと表裏一体の行動であったと考えられる。

権力者と隱逸との関係の有りようを示す史料として、『晋書』卷 130、赫連勃勃(3209 頁)に、

勃勃歸于長安、徵隱士京兆韋祖思。既至而恭懼過礼、勃勃怒曰、吾以国士徵汝、奈何以非類処吾。汝昔不拜姚興、何独拜我。我今未死、汝猶不以我為帝王、吾死之後、汝拜輩弄筆、当置吾何地。遂殺之。

(後秦の第二代皇帝姚興に仕えていたが、のちに背いて長安を攻め、皇帝を僭称した赫連)勃勃は、長安に帰り、隱逸の士である京兆の韋祖思を徴した。(韋祖思は)すぐにやって来て、(勃勃に対して)うやうやしく対応し恐れることが礼に過ぎたために、勃勃は怒って「私は中国の中の最も優れた人物という立場をもって、あなたを徴したのに、なぜ私を身分や志の異なるものとして扱うのか。あなたは昔、姚興には拝さなかったのに、なぜ私にだけ拝するのか。私は今まだ死んでいないのに、あなたは私を帝王とは考えていない。もし私が死んだら、あなたたちは思うままに文章にして、私をどのように扱うかわからない」と言い、ついに韋祖思を殺してしまった。

とあり、権力者が優れた統治者であることを示すために、隠れた徳の高い士人を朝廷に召すことは、赫連勃勃のころ¹⁴にはすでに慣例となっていたようである。

このような慣例は、統治者がその徳や志を示すために、隠逸を徴することにその意義があったのだろう。劉宋建国期においては、権力者にとって政治的な節目に、統治者としての徳の高さを示すために隠逸を召し出すことが多い。また同時に、朝廷に仕えないことが隠逸の重要な要素となっており、隠逸は、「徴召と不就」を通じて隠逸としての名声を得ていたのであり、この両点において、隠逸と政治権力とは相互に重要な存在であった。隠逸とは、政治権力内に組み込まれない存在ではあったものの、実際的には、政治権力の枠内において認められていたものであり、また、その枠内で重要な役割を果たしていたといえる。

このことは、特に政治権力の確立の時期にいえることであろう。隠逸と「不就」は相互関係にあり、「不就」であるから隠逸なのであり、また同様に、隠逸であるために「不就」という風潮が、徳の高さを示すために隠逸を辟召する当時の権力者と隠逸の間に存在し、認められていた。先に引用した赫連勃勃の記事は、このような漢文化の、通常は表出しない風潮に、異民族の武人である赫連勃勃が関わったことが背景となつてうまれた記事といえるだろう。

劉宋建国後、宗炳は劉裕によって太子舎人、通直郎、太子中舎人、太子中庶子に、また当時文帝に従い江陵にあった衡陽王義季によって、諮議参軍に徴されているが、いずれにも就かず、荊州内の建平郡の巫山や湘州の衡陽郡の衡山へ遠遊し、病のためまた江陵に戻った。

祖風ありといわれた孫の宗測は、生年は不祥、495年（南齊明帝、建武2年）に没した人物である。『歴代名画記』¹⁵『南齊書』¹⁶の宗測伝には、「代々江陵に居した」とあることから、宗炳が廬山から戻って宅を建てた江陵は、宗氏代々の生活基盤となっていたらしいことがうかがえる。

485年（南齊武帝、永明3年）、太子舎人に徴されたが就かず、長子の宗賓が都で仕官していたのを江陵に帰し、江陵近くの南郡の丞とした。宗測は、この宗賓に「家事」をまかせ、再び廬山に向かった。しばらくして、弟の喪のためにまた西に帰り、旧宅であった永業寺に留まって、隠逸の同志である庾易、劉虬、宗人尚之と講説を行ったとある。

永業寺については、詳細は不明であるが、庾易は『南史』に伝があつて「移って江陵に居した」¹⁷とあり、劉虬もまた『南史』の伝に同様の文章¹⁸が見られることから、宗測が廬山から西に帰って旧宅永業寺に留まったとあるのは、やはり江陵であったと考えてよいだろう。『南史』巻50、劉虬（1249頁）には、

虬精信积氏、衣粗布、礼仏長斎、註法華經、自講仏義。

劉虬は、よく积氏を信仰し、衣服は粗末なものを着、仏を礼拝して長斎をおこない、法華經に注をつけて、自ら仏義を講じた。

とあるから、宗測が永業寺に留まっていたのも、宗炳のころからの江陵における仏教的な

関わりに基づくのではないだろうか。

宗測は廬山にいたころ、宗炳の旧宅に居していた。この旧宅については、宗炳が釈慧遠についていたころに廬山に宅を建てたものと考えられる。また、宗測には『衡山記』、『廬山記』という著作があり、宗炳も生前衡山へ遠遊していたことから、宗炳は、衡山にも宅を持っていたとも考えられ、宗測の『衡山記』『廬山記』は、当地にしばらく留まって書かれたことが予想される。これらの著作は、精神的にも物質的にも、隠逸として高名であった祖父の宗炳が築いた基盤に少なからずよったものであったといえるだろう。

3 周統之

周統之は、『宋書』『南史』の隠逸伝にそれぞれ伝があり、雁門広武の人である。『宋書』の記載によれば、377年（東晋孝武帝、太元2年）に生まれ、423年（劉宋少帝、景平元年）に没した。予章の建昌に居しており、予章太守であった范寧が郡にたてた学校に388年（孝武帝、太元13年）に入学し、数年の間そこで学んで名声を得た。

その後廬山に入って釈慧遠につき、この頃、陶淵明や、同じく釈慧遠につき、また白蓮社十八賢の一人でもあった劉遺民とともに「尋陽三隱」といわれた。江州のあたりではすでに隠逸として名を知られ、この後、南予州の姑孰に鎮していた劉毅に撫軍参軍や太学博士に徴せられた。江州刺史とも隠逸として交流があり¹⁹、江州刺史劉柳のときには、劉柳に推薦され太尉掾にも徴されている。

劉裕の北討のとき、周統之は安楽寺の館に招かれて、一ヶ月ほど礼を講じたことがあった²⁰。同様のことは、このほかにもあったようで、蕭統の『陶淵明伝』²¹には、

刺史檀韶、苦請統之出州、与学士祖企、謝景夷、三人共在城北講礼、加以讎校。

刺史の檀韶は、強く統之に州に出てくることを請い、学士の祖企、謝景夷とともに街の北で礼経を講じ、さらにその校正をさせた。

とある。檀韶が刺史となったのは、416年（東晋安帝、義熙12年）からおそらく422年（劉宋武帝、永初3年）までのいずれかの期間のことで²²、周統之伝にある安楽寺の館に迎えられたという記事は、高祖の北伐（義熙12年、416年）よりも前のこととして書かれていることから、周統之伝の記事にある「礼講」と、『陶淵明伝』にある城北、すなわち尋陽北における「講礼」とは、それぞれ別の出来事を指していると考えられる。

劉毅が姑孰に鎮していたのが、410年（義熙6年）盧循の軍が江州を破って都建康に迫った²³ため、劉毅が南征を表するまでのことであり、また「高祖之北討」とあるのが、おそらく409年（義熙5年）から翌年、鮮卑の慕容超が淮北に侵攻したために劉裕が北討を表したのを指していると考えられる²⁴。よって、『宋書』周統之伝の安楽寺における講礼の記事は、記事の順番から考えるならば、409年（義熙5年）から410年（義熙6年）までの間の出来事であったといえるだろう。

このあと劉裕が416年（義熙12年）に北伐を行い、帰って彭城に鎮した、おそらく417

年（義熙 13 年）に、劉裕は周統之に使をやり、周統之を迎えて礼遇し、贈り物を賜った。前述した尋陽城北での講礼については、陶淵明の詩「示周統之祖企謝景夷三郎」があり、これから判断すると、416 年（義熙 12 年）のことである。そして、劉裕が皇帝の位についた 420 年にまた徴され、このときは室中のもの全て一緒に建康へ赴いた。劉裕は、建康城の東に館を開いてここに周統之を住ませ、生徒をあつめ儒学を講じさせ、劉裕自ら、この館に行幸することもあった。その後、周統之は病のため講義ができなくなり、再び山に隠居するが、この時は廬山へは戻らずに、建康東の鍾山へと移っている。

周統之は官職に就くことはなかったものの、宋建国期に政治権力側から隠逸として扱われるようになってからは、権力者側からの要請に応じて出仕している。周統之の場合、宗炳や宗測のように各所に宅があったのとは異なり、ほとんどを廬山で過ごし、410 年ごろからは、しばしば召し出しに応じて、政治権力に近い居宅で過ごしたものと考えられる。晩年鍾山に移ったとあるが、鍾山は建康からさほど離れていない場所に位置していることから、政治権力と完全に切り離されて隠居したと考えるのは難しい。

周統之の場合、学問が可能な家柄であるから、郷里における名声もあったであろうが、周統之が隠逸として名を知られるようになったのは、主として范寧がたてた郡学での学問と、白蓮社における主要な地位に由来するものと考えられる。そのため、周統之の行動の範囲は、廬山もしくは権力者の側によったものになったといえよう。廬山を離れたあとの周統之は、政治権力から与えられた隠逸という地位によっていたと考えられるからである。

4 雷次宗

雷次宗は、『宋書』『南史』の隠逸伝にそれぞれ伝があり、予章郡南昌県の人である。『宋書』の記載によれば、386 年（東晋孝武帝、太元 11 年）に生まれ、448 年（劉宋文帝、元嘉 25 年）に没した。若くして廬山に入り、釈慧遠について学び周礼、儀礼、礼記や詩経に精通し、員外散騎侍郎などに徴されたが就かなかった。

438 年（元嘉 15 年）、雷次宗の晩年になってからのことであるが、徴されたため建康に行き、鷄籠山に館を開いて学生百人に講義を行った。『建康実録』巻 12、太祖文皇帝、元嘉 15 年 8 月条（423 頁）には、

是月、立儒学於北郊、延雷次宗居之、辞入官掖、乃自華林東閣入講於延賢堂。

この月（438 年 8 月）、宮城の北に儒学の学校をたて、雷次宗を招いてここに住ませた。（雷次宗は）宮城に入るのを辞したので、華林園の東の門から入り、延賢堂において講義を行った。

とあり、隠逸としての立場を強調している。また、『宋書』巻 93、隠逸、雷次宗（2293 頁）には、

会稽朱膺之、潁川庾薛之、並以儒学、監総諸生。

会稽の朱膺之、潁川の庾薛之は儒学を担当し、諸学生を統べて監督した。

とある。このころ、何承天が史学をたて²⁵、何尚之が玄学をたて²⁶、謝元²⁷が文学をたてて、雷次宗の儒学と合わせて、文帝は四学をそろえ国士学とした²⁸。何承天、何尚之、謝元は雷次宗のような隠逸ではなく、もともと仕官していた人物である。

何承天と何尚之は、立学するときそれぞれ国士博士と国士祭酒について、それぞれの学館をまとめており、謝元もおそらく同様だったと思われる。雷次宗の場合は、隠逸という立場から仕官には応じなかったため（鶏籠山における立学するときにも、給事中に召されているが就かなかった）、朱膺之と庾蔚之が儒学館をまとめたのだと考えられるが、『南齊書』にも「儒士雷次宗が鶏籠山に学館を立てた」²⁹とあり、当時たてられた国士学における雷次宗の地位は、何承天、何尚之、謝元と同程度のものであったといえよう。

以上のことから、隠逸とは当時国家のなかにおいて重要な意義を持っていたものと考えられる。政治権力側の、雷次宗に対する待遇も破格のもので、文帝がたびたび雷次宗の学館をたずね多くの贈り物を賜っている。しばらくして、再び廬山に帰るときには、公卿以下が祖道（送別の宴）まで雷次宗のために設けている。官職に就かない、即ち皇帝に直接仕えない人物に対し、これほどの敬意を示す必要があったことから、すでに皇帝権力によってつくられた枠組みの中で、隠逸がその構成の一部をなしていたことがうかがえる。

448年（元嘉25年）、雷次宗の最晩年であるが、再び徴され建康に至り、建康近くの鍾山に「招隠館」という学館をつくって、そこで皇太子や諸王に対し喪服経を講じた。この『宋書』巻93、隠逸、雷次宗伝にある元嘉25年の詔（2294頁）のなかに、

雷次宗、篤尚希古、経行明修、自絶招命、守志隠約。

雷次宗は、上代を重んじ古をこいねがい、行いに節操があつて賢く学問を修めた。みずから召し出しを断つて、（隠逸の）志を守り姿を明らかにしない。

とあり、隠逸として建康に招かれたことは明らかである。また、そこで行われる隠逸による講義を皇帝がたずねるといふ構図は、前述の周統之とほぼ同様である。この構図において重要なことは、周統之や雷次宗の隠逸という立場にあったといえる。さきに引用した元嘉25年の詔でも明らかであるが、さらに雷次宗が役所に入ることを避けたという前に引用した『建康実録』の記事も、雷次宗自身が、その他の官人と性質的に異なる存在であることを示した行動であったと考えられる。

招隠館を開いたその年、館のあった鍾山で雷次宗は没した。雷次宗は、はじめ廬山の積慧遠のもとで学び、そこで名声を得て、朝廷の要請に応じて講義をたびたび行い、廬山から建康へと移った。政治権力に近い位置を、隠逸として得ていき、鍾山で没するというのは、周統之や雷次宗に共通した事柄である。

以上、廬山の白蓮社に関わる隠逸について、宗炳、周統之、雷次宗を中心に述べた。ここから、宗炳やその一族のように基盤とする土地を持つ者と、周統之や雷次宗のように、政治権力によって与えられた隠逸という地位に直接的に依拠していく者とがいたことがわかる。しかし、周統之や雷次宗が政治権力と深く関わって、隠逸の地位を与えられ、それを基盤と出来るようになったのは、かなり晩年になってからのことであり、根本にあった

ものは、それまでの廬山白蓮社における名声であった。これは、すなわち廬山という土地にあった世論で得た名声といえよう。廬山には当時、陶淵明や謝靈運など有名な文人が集まっていた。三教交渉の時代であった当時、白蓮社のような著名な学団に文人たちが集まるのは十分に考えられることであり、当然世論も存在したであろう。

以上に述べた宗炳、周統之、雷次宗のほかに、彼らと同じころ隠逸として名声があり、また宗炳と同様に廬山に入って釈慧遠につき、白蓮社十八賢に名を連ねた人物に、劉遺民と張野を挙げることができる。

劉遺民は、周統之や陶淵明とともに「尋陽三隱」といわれた人物であり、陶淵明とも面識があった。陶淵明が劉遺民に対して贈った詩が二首残っている³⁰。張野は、陶淵明と姻戚関係にあった人物である。陶淵明と白蓮社に関わる隠逸との関係は、以上のように浅からぬものであるが、陶淵明が、直接白蓮社と関わっていたかどうかは不明である。

5 その他白蓮社に関わる知識人

白蓮社には、宗炳、周統之、雷次宗のように入社した者のほかにも、少なからず有名な知識人が訪れた。『白蓮高賢伝』には「不入社諸賢伝」が最後にたてられており、陶淵明、謝靈運、范寧の三名について述べられている。彼らは白蓮社の徒ではなかったが、それとかなり近い位置にいたと考えて大過ないだろう。

陶淵明は、『宋書』『晋書』『南史』の隠逸伝にそれぞれ伝があり、尋陽柴桑の人である。『宋書』の記載によれば、365年（東晋哀帝、興寧3年）に生まれ、427年（劉宋文帝、元嘉4年）に没した。祖先は西晋の大司馬だった陶侃で、陶侃以来、代々江州の尋陽に住んでいた。陶淵明は、陶侃の直系の子孫ではなかったものの、名家であったといえるだろう。正史中にも、陶淵明が廬山を訪れた記事があり、『蓮社高賢伝』不入社諸賢伝（17頁）には、

時遠法師与諸賢結蓮社、以書招淵明。淵明曰、若許飲則往。許之。遂造焉、忽攢眉而去。

時に釈慧遠は諸賢とともに白蓮社をつくり、書を送って陶淵明を招いた。陶淵明は、「酒を飲んでもよいなら行く」と言ったので、これを許可した。陶淵明は、やって来るなり、眉をしかめて帰ってしまった。

とある。また、白蓮社十八賢のうちの一で、陶淵明とともに「尋陽三隱」といわれた劉遺民から隠棲を勧められている³¹。同様に、白蓮社十八賢の一人であった張野とも姻戚関係にあり、陶淵明は白蓮社からの勧誘に応じることはなかったものの、知識人として、彼らとの交流があったのだと考えられる。

謝靈運は、『宋書』『南史』に伝があり、陳郡陽夏の人である。両書の記載によれば、385年（東晋孝武帝、太元10年）に生まれ、433年（劉宋文帝、元嘉10年）に没した。

『廬山記』巻2、叙山北（9頁）には、

一見遠公、肅然心服。乃即寺翻涅槃經。因鑿池為台、植白蓮池中。

（謝靈運は）一度釈慧遠に会うと、慎みかしこまって感服した。そこで、寺で涅槃經を翻訳し、それに因んで池を掘り、台を造って白蓮を池の中に植えた。

とあり、また、『廬山記』巻2、叙山北（17頁）には、

宝寧之西則有石門、（中略）靈運望石門詩曰、高峰隔半天、長崖斷千里、鷄鳴青澗中、猿嘯白雪裏。

宝寧の西には、石門がある。（中略）謝靈運は、石門を眺めて詩をつくって言った。「高い峰は天を半ばに分け、長い崖は大地を断つ。鷄は青い谷川のなかに鳴き、猿は白い雪のなかに声を長くひいてほえる。

とある。謝靈運の詩に「廬山の頂上に登り諸嶺を望む」と題したものもあり、以上のことから、謝靈運が廬山白蓮社やそこに集まる隠逸とも関わりがあった可能性は高い。『蓮社高賢伝』には、実際に謝靈運が白蓮社への入社を求めたと記されている³²。

一方、謝靈運は、会稽に別荘を有し、会稽周辺の隠逸である王弘之や孔淳之らとも交際があった。『宋書』巻67、謝靈運（1753頁）に、

（永嘉）郡有名山水、靈運素所愛好、出守既不得志、遂肆意游遊、遍歷諸県、動踰旬朔、民間聽訟、不復関懐。所至為詩詠、以致其意焉。在郡一周、称疾去職、従弟晦、曜、弘微等並与書止之、不従。

（永嘉）郡には有名な山水があり、謝靈運は平素から愛好していた。京官から出て地方の太守となり、力を尽くすことがなく、ついに思いのままに遊び歩き、諸県を遍歴することは、ややもすると十日をこえた。民間の訴えを聞くことには心をかけず、いたる所で詩を詠じて思うところを成した。郡にて一巡りすると、病気だといって辞職した。従弟の謝晦、謝曜、謝弘微らはみな手紙を書いて止めたが、謝靈運は従わなかった。

とあるように、謝靈運の性質には隠逸との共通点がみられる。しかし、官職のなかではたした役割が重かったために、謝靈運は隠逸として扱われることがなかったのだろう。隠逸的な性質を備えているものの、さきに述べたような隠逸たちのように、政治権力から与えられた隠逸という評価に応える必要がなかったため、謝靈運はその著作「山居賦」³³の中で比較的詳細に会稽山の豊かな様子を述べている。

「山居賦」によれば、会稽山は水草、本草（木と草、葉草）、木、魚、鳥、動物など、都では珍しい動植物が会稽山で見られたことが述べられ、「山居賦」は都市において流行している。謝靈運をはじめ、当時の文人たちが著したり愛好したりした文学作品のなかには、以上にあげたような果樹草木や鳥獣、また自然の景観を組み入れたものも少なくなく、都市の繁栄を表す題材と対になって、都市の文学作品のなかで、重視されていた題材であったと考えられる。このような題材の流行も「山居賦」が都市においてもはやされた一因となったのではないだろうか。

このような都市の知識人の間における山水の流行を背景として、山が重要視されるようになったと考えられるが、さらに、山は物質的な利益をもたらすものでもあった。「山居賦」には、隠逸篇にある山水の雰囲気とは異なり、華やかで豊富なイメージで山の様子が述べられている³⁴。実際に、謝靈運は会稽山の北山に二つの果樹園と、南山に三つの苑地を有しており、杏、みかん、りんご、栗、桃、すもも、梨、びわ、桑、梅、柿など種々の果樹を栽培していたようである³⁵。

これらの品々を文人が栽培することは、珍しいことではなかったようである。晋の司徒であった王戎(233 - 305)は、家ですももを栽培して売っていたし³⁶、東晋の高官であった和嶠(- 403)も家に李園を持っていた³⁷。中国では、実のなる木が古来愛されていたようで、謝靈運は「山居賦」に自ら注をつけて、杏、梨、橘が古くからいろいろな著作に見られることを示し、これらの果樹園の正統性を主張している。

一方で、謝靈運が代々の財産をもとに家業に熱心であったので、これらの果樹園も単に観賞や風流のためだけのものであったとは考えにくい。「山居賦」中の植物も、建築や家具の材料や薬として用いられるもの、すなわち都市で需要のあるものが少なくなかった。

当時の隠逸の特徴でもあった「山水を好む」という隠逸伝での書き方は、『宋書』隠逸伝におさめられた隠逸たちの性質を表すものとして、ほとんどの隠逸がそのように表現されている。しかし、隠逸伝のなかでは、謝靈運の「山居賦」に見られるような山における苑地の物質的豊かさを誇るような文章は一切見られない。ただ景観や雰囲気の俗的でない様子を述べるのみである。謝靈運の「山居賦」は、山水のもう一つの面を明らかにするものである。このような山水のもつ豊かな一面は、謝靈運に限られるものではないだろう。

范寧は、伝はなく、中央で中書侍郎となったあと予章太守に遷った。前述の周統之が、釈慧遠につく以前に学んでいた、予章の学校の創立者である。范寧の建てた学校で学び、学業に優れて名声を得た周統之が白蓮社に入り、十八賢として社の中心的な役割を果たしていくことになったことから、范寧と白蓮社との関連はうかがい知ることが出来る。さらに『蓮社高賢伝』慧持法師伝(7頁)には、

予章太守范寧、請師講法華經阿毘曇論。四方雲聚。琅邪王恂与范寧書、問遠持二公孰愈。

予章太守范寧は、慧持に法華經阿毘曇論の講義を頼んだ。このため、四方から人々が雲集した。琅邪王司馬恂は、范寧に書を送って、慧遠と慧持はどちらが優れているか尋ねた。

とあり、范寧と釈慧遠、慧持が親しい間柄であったことを示している。また、ここでも官人による白蓮社における月旦評が取り上げられていることが注目される。

第2節 廬山の山水の性質

以上見てきたように、廬山には、白蓮社を中心として、仏教に限らず様々な学問に通じ

た知識人があつまり、宗教、文学を核とした学問の場が形成されていた。『宋書』巻 93、
隱逸、宗炳（2278 頁）に、

入廬山、就積慧遠考尋文義。

（宗炳は）廬山に入って、積慧遠につき、文章の意義を研究した。

とあるのも、積慧遠の白蓮社が仏教を中心としながらも、多様な学問を行っていた場であ
ったことを示している。また、積慧遠が白蓮社に集まっていた隱逸について書いたとされ
る「隱士劉遺民らに与える書」とその序文³⁸には、

是時、閑退之士、輕挙而集者、若宗炳、張野、周統之、雷次宗之徒、咸在会焉。遺民
与群賢遊処、研精玄理、以此永日。遠乃遺其書曰、（中略）君諸人、並為如来賢弟子。
策名神府、為日已久。徒積懷遠之興、而乏因籍之資。以此永年、豈所以勵其宿心哉。
この当時、隱逸の士で世俗を捨てて（廬山に）集まったもの、例えば宗炳、張野、周
統之、雷次宗らは、いずれも、この地に一緒に住んでいたが、劉遺民はこれらの人々
と起居行動を共にし、幽玄な哲理を深く研究して、終日たのしんでいた。慧遠はそこ
で彼らに次のような書簡を遺った。（中略）ところで諸君は、みな如来のすぐれた弟子
であり、仏門に身を置いてから已に久しくなるが、徒らに深遠な哲理を懐うことばか
りに興味を深くして、悟りをうるための実践的な修行の功德を積もうとする努力には
乏しく、このまま歳月を過ごせば、どうして本来の志を励いて悟りを得ることが出来
ようか。

とあり、彼らが学問的に優れていても、仏教的な実践はあまり行わなかったことが述べら
れている。当時の隱逸が集まる白蓮社は、仏教的な結社であったが、ここにおいても清談
の風があったと考えられる。さらに、白蓮社のなかで優秀であったことから名声を得て、
朝廷に徴されたと考えられる雷次宗、周統之の存在からは、廬山での評判が、世間での評
判と同調していたことを示していると考えられるのではないだろうか。

廬山の特徴は、山でありながら、その地域に縁を持ち、すでに名声を得ていたものたち
にとっては、政治権力との関わりをもつ場となっていたことである。中央政権、范寧の学
校と白蓮社の間には明らかに関連があり、従来の山水という理解だけで把握することは難
しい。おそらく、白蓮社とは特別な社会的集団で、学ぶための好条件がそろっており、沙
門だけでなく、学問を好む優秀な人材が集まっていたのであろう。逆にいえば、当時の中
央政権側には、最新の学問を行ううえでの条件がそろっていなかったのである。

このように、廬山の白蓮社は、それに関わる隱逸にとっても、政治権力側にとっても俗
世間を離れた土地ではありえなかった。そこには、官職についていた文人もいたし、世間
での評判、世論も存在したのである。また、儒教、仏教、道教の三教交渉が進んだ当時、
官人、僧、隱逸の知識人が一つの場所に集まるということは当然考えられることであり、
そのような場として、山水は適当な土地であった。

そのような状況のなかで、彼らは隱逸としての地位を得て、また新たな名声を加えてい
くわけであるが、政治権力側が、そのように隱逸を必要とした理由は何であったのだろう

か。それは、おそらく劉宋建国という時期に、その主な理由があったのではないかと考えられる。統治者が代わって、その優れた徳を示すために、隠れた賢人をもとめて朝廷に召すということは、権力者がたびたび行ってきたことである。前に引用した、赫連勃勃の逸話のなかで、「国土」すなわち皇帝を称したときに、赫連勃勃が隠逸を召し出したのも、このような慣習を踏襲したものであろう。このような政治的背景のもと、朝廷に徴された彼らは、周囲からも隠逸として認識されることが、政治権力によって求められたと考えられる。同時に、政権がしっかりと確立していなかった当時、書物など学問的な物量において白蓮社は有利であり、優秀な人材が多く白蓮社側に流れていたのではないだろうか。

むすび

本章では、廬山の山水の実態がどのようなものであったのかを論じた。

その結果、廬山白蓮社は、隠逸のみにとどまらず、当時の知識人が集まる場として機能しており、政治に関わる世間での評判、世論が存在していたと考えられ、その為、俗世間と切り離されて、実際の隠逸的山水が成立していたわけではないと考えられることを述べた。

政治権力者にとっても、この時期に彼らを隠逸と位置づけることには意義があり、それを受けて、彼らは山水において隠逸と言う名声を新たに得ていくこととなった。

廬山の山水は、白蓮社が存在したことから、とくにこの傾向が強かったと考えられるが、他の山水においても、その山水が有名であればあるほど知識人、官人が集めることは同様であり、少なからず政治とのつながりがあったものと思われる。

このような状態は、(1) 王朝が南遷したことで、官職に就いていなかった名声ある人々が注目されるようになったこと、(2) 宋という新しい王朝の建国時期にあったこと、(3) 三教交渉の時代にあたり官人、僧、隠逸などの知識人が山に集まっていたこと、(4) 山水の風流的豊かさが謝靈運のような高官文人にも注目されていたこと、の諸条件がそろったことによって、出現したと考えられる。

隠逸が、知識人に評価され、隠逸としての性格を強めていく一方で、同様にまた、彼らにとっての山水の役割も変化していった。廬山の山水は、学問的な性格をもっていた山水から、隠れた逸材を国家に招くという、建国期にともなう政治権力からの需要をうけて、世間や都市の文化と切り離されることなく、隠逸の山と認識されるようになった。

『宋書』隠逸伝には、廬山のほかにも会稽山など有名な山水が登場するが、それらについては、第5章において言及する。

注

- 1 李亮「山水隱逸与資生適性—以謝靈運中心」、『中華文史論叢』第49輯、1992年、233 - 246頁。
- 2 盧海鳴「六朝建康的私家園林」、『東南文化』114号、1996年、92 - 94頁。
- 3 韋鳳娟「魏晉的莊園經濟与山水詩的興起」、『江漢論壇』1982・10、1982年、45 - 50頁。
- 4 江南の開発については、多数の先行研究が存在する。主な研究書は、許輝・蔣福璽『六朝經濟史』、南京：江蘇古籍出版社、1993年。中村圭爾『六朝江南地域史研究』、東京：汲古書院、2006年など。
- 5 大室幹雄『園林都市—中世中国の世界像』、東京：三省堂、1985年、613頁。
- 6 『蓮社高賢伝』（叢書集成初編、中華書局、1991年、6頁）慧永法師伝「刺史陶範、素揖道風。乃留築廬山舍宅、為西林以奉師」。
- 7 『蓮社高賢伝』慧遠法師伝（2頁）、「率衆至百二十三人」。
- 8 宗彧之は『宋書』卷93、『南史』卷75（ともに中華書局版、正史は以下同様）に、宗測は『南齊書』卷54の高逸伝、『南史』卷75の隱逸伝にそれぞれ伝がある。
- 9 『南史』卷75、隱逸、宗炳附宗測（1862頁）、「唯与同志庾易、劉虬、宗人尚之等往来講說。（中略）尚之字敬文、亦好山沢、微辟一無所就、以寿終」。
- 10 『宋書』卷93、隱逸、宗炳（3278 - 3279頁）、「炳外弟師覺授亦有素業、以琴書自娛」。師覺授は、『南史』卷73、孝義にも伝がある。
- 11 『宋書』宗炳伝には、母師氏についても「聡并有学義」とあり、家柄は悪くなかった。
- 12 王雲五主編、叢書集成初編『天台山記及其他四種』所収、商務印書館、1939年、9頁。
- 13 『宋書』卷93、隱逸、宗炳（2278頁）、「乃下入廬山、就釋慧遠考尋文義。兄臧為南平太守、逼與俱還、乃於江陵三湖立宅、閑居無事」。
- 14 『建康實録』義熙14年10月条（中華書局版、348頁）、「是月赫連勃勃僭帝位於長安」。義熙14年は418年。
- 15 張彦遠『歷代名画記』卷73、宗測評伝、「代居江陵」。
- 16 『南齊書』卷54、隱逸、宗測（940頁）、「世居江陵」。
- 17 『南史』卷50、庾易（1244頁）、「庾易字幼簡、新野人也、徒居江陵」。
- 18 『南史』卷50、劉虬（1248頁）、「劉虬字靈預、一字德明、南陽涅陽人、晋予州刺史喬七世孫也。徒居江陵」。
- 19 『宋書』卷93、隱逸、周統之（2280頁）、「江州刺史每相招請、統之不尚節峻、頗從之游」。
- 20 同上「高祖之北討、世子居守、迎統之館于安樂寺、延入講礼、月余、復還山」。
- 21 引用の本文、訳は『陶淵明全集』（松枝茂夫・和田武司、東京：岩波書店、1979年、上24 - 25頁）による。
- 22 『宋書』卷45、檀韶（1373頁）、「（義熙）十二年、遷督江州予州之西陽新蔡二郡諸軍事、江州刺史、將軍如故」。卷3、高祖本紀（58頁）には「（永初）三年、…撫軍將軍、江州刺史王弘進号衛將軍、開府儀同三司」とあり、このときすでに王弘が江州刺史である。
- 23 『宋書』卷1、高祖本紀義熙6年2月（18頁）、「循從之、乃率衆過嶺。是月、寇南康、廬陵、予章、諸郡守皆委任奔走」。
- 24 『宋書』卷1、高祖本紀（15頁）、「（義熙）五年二月、大掠淮北、執陽平太守劉千載、濟南太守趙元、驅略千余家。三月、公抗表北討、以丹陽尹孟昶監中軍留府事」。
- 25 『宋書』卷64、何承天（1705頁）、「（元嘉）十九年、立国士学、以本官領国子博士」。
- 26 『宋書』卷66、何尚之（1734頁）、「（元嘉）十三年、（中略）乃以尚之為尹、立宅南郭外、置玄学、聚生徒」。
- 27 『宋書』卷64、何承天附謝元（1711頁）、「（謝）元字有宗、陳郡陽夏人、臨川内吏靈

運從祖弟也。以才学見知、卒於禁錮」。

28 『宋書』卷 93、隱逸、雷次宗 (2293 頁)、「時国士学未立、上留芸術、使丹陽尹何尚之立玄学、太子率更令何承天立史学、司徒参軍謝元立文学、凡四学並建」。

29 『南齊書』卷 1、高帝本紀 (3 頁)、「儒士雷次宗立学於鷄籠山、太祖年十三、受業、治礼及左氏春秋」。前の文章に「太祖以元嘉四年丁卯歳生」とあるから、ここでは立学は元嘉十六年。

30 『陶淵明全集』「和劉柴桑」と「酬劉柴桑」の二首。「和劉柴桑」は、陶淵明に劉遺民が隱棲をすすめたことに対する返事。

31 『陶淵明全集』卷 2、「和劉柴桑」。

32 『蓮社高賢伝』不入社諸賢伝 (18 頁)、「靈運嘗求入社。遠公以其心雜而止之」。

33 「山居賦」は会稽の山について、謝靈運が書き自ら注をつけたもので『宋書』卷 67、謝靈運伝にも収められている。「山居賦」が書かれた当時の評判は、『宋書』謝靈運伝には「每有一詩至都邑、貴賤莫不競写、宿昔之間、士庶皆遍、遠近欽慕、名動京師」とある。

「山居賦」の内容は、その冒頭部分に「今所賦既非京都宮觀遊獵声色之盛、而叙山野草木水石穀稼之事、才乏昔人、心放俗外、詠於文則可勉而就之、求麗、邈以遠矣」とあるように、山の景観や動植物など、特徴的なことがらについて書かれている。

34 『宋書』卷 67、謝靈運 (1766 頁)、「陟嶺刊木、除榛伐竹、抽笋自篁、擿籜于谷。楊勝所拮、秋冬【草かんむりに片と畧】獲。野有蔓草、獵涉夔夔。亦醞山清、介爾景福。苦以朮成、甘以【手偏に審】熟。慕樵高林、剥芟巖椒。掘蒨陽崖、擿【手偏に鮮】陰標。(中略)備物為繁、略載靡悉」。

35 『宋書』卷 27、謝靈運 (1768 - 1769 頁)、「北山二園、南山三苑。百果備列、乍近乍遠。羅行布株、迎早候晚。猗蔚溪澗、森疎崖巘。杏壇、【木偏に奈】園、橘林、栗圃。桃李多品、梨棗殊所。枇杷林檎、帶谷映渚。榲梅流芬於回轡、棗柿被實於長浦」。

36 『晋書』卷 43、王戎 (1234 頁)、「家有好李、常出貨之、恐人得種、恒鑽其核」。

37 『世說新語』第二九、儉嗇 1、「家有好李、王武子求之、与不過數十。王武子因其上直、率將小年能食之者、持斧詣園」。

38 『慧遠文集』与隱士劉遺民等書。木村英一編『慧遠研究遺文篇』、東京：創文社、1960 年所収。本文・日本語訳とも、同書 427 頁から引用した。

表3 『宋書』卷93、隱逸伝掲載の人物と山における活動

		山名、場所	山での活動等	記載頁 (中華書局版)
1	戴顒	会稽剡県	会稽剡県多名山、故世居剡下	2276
		呉郡桐廬県	桐廬県又多名山、兄弟復共游之、因留居止	2276
		黄鵠山	顒憩于此澗	2277
2	宗炳		每游山水、往輒忘帰	2278
		廬山	就釈慧遠考尋文義	2278
		荆、巫	好山水、愛遠遊	2279
		衡山	結宇	2279
3	周統之	廬山	事沙門釈慧遠	2280
		鍾山	移病鍾山	2281
4	王弘之		性好山水	2281
		始寧沃川	有佳山水、弘之又依巖築室	2282
5	阮万齡	記載なし	記載なし、(家在会稽剡県)	2283
6	孔淳之	会稽剡県	居会稽剡県、性好山水	2283
7	劉凝之	衡山	性好山水。隱居衡山之陽	2285
8	龔祈	記載なし	記載なし	
9	翟法賜	廬山	立屋於廬山頂	2286
10	陶潛	廬山	嘗往廬山	2288
11	宗彧之	記載なし	記載なし	
12	沈道虔	呉興武康石山	居縣北石山下	2291
		武康麋頭里	県令庾肅之迎出県南麋頭里、為立小宅、臨溪、有山水之玩	2291
13	郭希林	記載なし	記載なし	
14	雷次宗	廬山	事沙門釈慧遠	2292
		鷄籠山	開館	2293
		鍾山西巖下	(上) 為築室	2294
15	朱百年	会稽南山	以伐樵採箬為業	2294
16	姚吟	記載なし	記載なし	
17	王素	記載なし	記載なし	
18	劉睦之	記載なし	記載なし	
19	州韶	湖熟方山	築室	2296
20	褚伯玉	剡県瀑布山	居剡県瀑布山三十余載	2296
21	関康之	記載なし	記載なし	

第5章 会稽の山水と知識人—東晋から劉宋初における隠逸と官人の交流関係を中心に—

はしがき

六朝において、会稽は、廬山と並んで山水の佳観で有名であり、当時の知識人に好まれた地である。

第4章「廬山の山水と知識人—劉宋建国期の白蓮社を中心に—」のなかで、廬山においては、白蓮社が媒介となって官人と非官人の交流を深め、このことが、官人・隠逸・僧等知識人を包括するコミュニティーを廬山の山水に成立させる一因となっていたことを述べた。

それでは、会稽においても、廬山の白蓮社に類する組織が存在して、同じような働きをしたのだろうか。

大室幹雄は『園林都市—中国中世の世界像』¹のなかで、江南の文化世界を、首都建康を中心に、外へ向かって、郊外—田園—原野と続く空間に分類して概念的に配置し、建康から一番離れた原野の空間に廬山と会稽を置いている（同書第12章、478頁）。そして、建康は、原野を含めた「外」に向かって開かれた都市として位置づける。例として、原野に別荘を持った謝靈運が、首都に向かっておこなった会稽の山水に関する「空言」（根拠のない言葉）が、京師を動かしていたことを指摘している。

また、劉淑芬は、「六朝会稽士族」²のなかで、当時の会稽の状況を、六朝政府の財源の要地の一つであり、呉郡の有力者が政治上で影響力を持っていたのと同様に、会稽の有力者は経済上での影響力を有した、と述べている。

高畑常信は、「王羲之の思想と隠逸」³において、王羲之の辞職後の生活が、「風景の美しい山陰県に住み、果物の木を植え、たくさんの孫たちにとりかこまれ、ひまをみては遠近の旅行を計画する」というものであったと述べる。そして、儒教の、しばらく退いて好機を待つための隠逸⁴と、道教の、隠逸そのものを最高の状態とする隠逸のあり方との間には、根本的違いがあり、当時、前者から後者へと思想が変化して、王羲之のような「市隠」の思想が生まれる原因の一つとなったと説明している。

以上のような先行研究から、会稽における知識人全般を包括するコミュニティーの成立の要因については、建康という都市が有する「外」に開かれた性格や、会稽における荘園経営の経済的利点、隠逸に対する都市の知識人の認識の変化などが、原因として考えられる。

しかし、以上の点だけから見ると、廬山における白蓮社のように、直接的に官人と隠逸とを結びつける場が存在しない。そこで、本章では、会稽において、そのようなものは存在しなかったのか、また存在していなかったとするならば、それでも廬山と同様に官人と非官人が都市から離れた山水において交流するような状況が会稽にも存在した理由を、新たに論じてみたい。

第1節では、『宋書』巻93、隠逸伝のなかから会稽の山水と関わりの深い隠逸をとりあげ、その人物と政治・経済的に関連の深かった人物や、土地について明らかにする。第2節では、第1節で述べた隠逸の交流関係の起源について、彼らの代から2、3代遡って考察し、当時の知識人の交流がどのようなものであったのかを明らかにしたい。

第1節 会稽周辺の隠逸

会稽周辺の隠逸に関して、『宋書』の隠逸伝のなかから、会稽の山水に居していたことが明らかかな人物を取り上げて述べる。

1 戴顒 (378 - 441)

戴顒は『宋書』巻93と『南史』巻75に伝があり、字は仲若、譙郡鉅県の人である。『宋書』の記載によれば、太元3年(378)に生まれ、元嘉18年(441)に没した。父の戴逵(-395、太元20年)は、『晋書』巻94、隠逸(2457頁)に伝があり、

戴逵字安道、譙国人也。少博学、好談論、善属文、能鼓琴、工書画、其余巧芸靡不畢綜。(中略)師事術士范宣於予章、宣異之、以兄女妻焉。(中略)逵後徙居会稽之剡县。

戴逵、字は安道、譙国の人。若いうちから博学で、談論を好み、文章を書くのが得意であり、鼓琴や書画が上手く、その他の芸術についての能力は、すべて記すことができないほどだった。(中略)術士范宣⁵に予章において師事した。范宣は、戴逵を特に優れていると思い、兄の娘を妻とした。(中略)戴逵は、後に住居を会稽の剡県に移した。

とある。戴逵は、多才で范宣のもとで注目され、范宣の兄の娘と結婚して会稽に居を移してのちは、王珣や謝玄とも交流を持ち、会稽における重要人物のひとりとなっていった(後述)。

このような環境で育った戴顒は、兄の戴勃とともに隠遁して名高く、また琴の名手としても有名であった。

住居に関しては、『宋書』巻93、隠逸、戴顒(2276 - 2277頁)に、

会稽剡县多名山、故世居剡下。(中略)中書令王綏常携賓客造之。(中略)桐廬县又多名山、兄弟復共游之、因留居止。勃疾患、(中略)桐廬僻遠、難以養疾、乃出居吳下。吳下士人共為築室、聚石引水、植林開澗、少時繁密、有若自然。乃述莊周大旨、著逍遥論、注礼記中庸篇。三吳将守及郡内衣冠要其同游野沢、堪行便往、不為矯介、衆論以此多之。

会稽剡県には名山が多かったので、代々剡下に住んでいた。(中略)中書令王綏は、かつて賓客を連れてここにやって来た。(中略)桐廬県もまた名山が多く、兄弟はまたみ

なここに遊し、留居してとどまった。戴勃に疾患があった。(中略) 桐廬県は僻地で都市から離れていたため、療養するのが困難であったため、桐廬県を出て呉の地に居した。呉の地の士人は、共に戴勃のために室を築き、石を聚め水を引き、林を植えて潤を開いた。わずかな時間で、植えた木々は繁密になり、その様子は自然のようだった。そこで、莊周の大旨を述べ、逍遙論を著し、礼記中庸篇に注をつけた。三呉の将守や郡内の衣冠は、一緒に野沢に遊ぼうと望んだ。行くことが出来るときは行き、孤高狷介を通すことはなかった。衆論はこれを褒めた。

とあり、前述の通り、父戴逵の代から会稽に居し、また戴顒は、桐廬県や呉県にも居していたことがわかる。剡県の居は、太原晋陽の人である王綏が賓客とともに訪ねており、また呉県の居についても「呉下士人」の協力を得て形成されたものである。これらの居は、隱遁とはいえ世間を避けるための居としてはとらえにくい。

さらに、呉県の地に関しては、前に挙げた父戴逵の伝にも記述が見られる。『晋書』巻94、隱逸、戴逵(2458頁)には、

孝武帝時、以散騎常侍、国子博士累徵、辞疾不就。郡県敦逼不已、乃逃於呉。

孝武帝の時、散騎常侍、国子博士を以てたびたび徵せられたが、父の病のため辞して就かなかつた。郡県は、熱心に官職に就くよう迫ることをやめなかつたので、呉に逃げた。

とあり、剡県に居していた戴逵が、郡県からの徵召を嫌い逃れた先が呉であった。戴顒が呉に室を築いた折の「呉下士人」たちの助力から見ても、戴顒が呉に父戴逵の代より、すでに地縁を有していたと考えられる。桐廬県の居に関しても、詳細は不明であるが、あるいは同様のことがあったのだろう。

次に、戴顒の姻戚関係について述べる。

前に挙げた戴顒の伝(『宋書』巻93、隱逸、戴顒、2277頁)には、

衡陽王義季鎮京口、長史張邵与顒姻通、迎來止黄鵠山。

衡陽王義季が京口に鎮したとき、長史張邵は戴顒と婚姻関係を結び、戴顒を迎え来て黄鵠山にとどまった。

とあり、戴顒は張邵と姻戚関係にあったことがわかる。張邵の本貫地もまた呉郡呉県であった。

張邵の兄の張裕(張茂度)と、甥の張暢は会稽太守に就いており、張邵は、晩年には呉興太守となっている。このことから、張邵は、戴顒とともに、三呉地方(呉郡・呉興郡・会稽郡一帯を指す)に縁故のあった人物であったといつてよいだろう。

また、同時期の隱逸である沈道虔の伝(『宋書』巻93、隱逸、沈道虔、2291頁)には、

沈道虔、呉興武康人也。少仁愛、好老、易、居県北石山下。(中略)受琴於戴逵、王敬弘深敬之。(中略)冬月無複衣、戴顒聞而迎之、為作衣服、并与錢一万。

沈道虔は、呉興武康の人。若い頃から仁愛にして、老、易を好み、県の北の石山の下に居した。(中略)琴を戴逵から教授され、王敬弘は、深く沈道虔を敬っていた。(中

略) 冬に衣服が無ければ、戴顓は聞きつけて沈道虔を迎え、衣服を作ってやり、錢一万を与えた。

とあり、戴顓は、呉興郡の沈道虔とも、父戴逵の代から親しくしていたことがわかる。戴顓の伝に、前に引用したように「三呉の将守及び郡内の衣冠、其れ共に野沢に遊せんと要む」という文章が見られることから、戴氏と三呉地方の関連性をうかがうことができる。

張邵も三呉地方に地縁を持っていた一族の出身であり、その張氏と姻戚関係を有することによって、より戴顓が三呉地方において力を持つようになったといえるだろう。

会稽の山水における戴顓の交友関係については、『宋書』巻 93、隱逸、孔淳之 (2248 頁) に、

(孔淳之) 与徴士戴顓、王弘之及王敬弘等共為人外之游。

孔淳之は、徴士の戴顓や王弘之、及び王敬弘らと共に人外の游を為した。とあることから、孔淳之や王氏との関わりも有していたことがわかる。

2 王弘之 (365 - 427)

王弘之は、『宋書』巻 93、隱逸伝に伝があり、字は方平、琅邪郡臨沂県の人である。興寧 3 年 (365) に生まれ、元嘉 4 年 (427) に没した。当時の名門であり、政治的にも有力であった琅邪王氏の一族の出身である。

妻の祖父にあたる人物は何準という人物で、幼いとき「孤貧」⁶であった王弘之は、この何準に育てられた。何準は「高尚寡欲にして、弱冠にて名を知られ、州府交々辟するも、並び就かず」⁷とあり、何準が王弘之に対して与えた影響が想像できよう。また、何準の娘は、穆帝 (343 - 361、在位 344 - 361) の章皇后 (339 - 404) であり、『晋書』巻 32、后妃下、穆章何皇后には「名家を以て選を膺く」⁸とある。また、皇后の選を何氏が受けたときの何琦の言葉のなかには、『晋書』巻 21、礼下 (667 頁) に、

皇帝嘉命、使者某到、重宣中詔、問臣名族。臣族女父母所生、先臣故光禄大夫、零婁侯禎之遺玄孫、先臣故豫州刺史、関中侯暉之曾孫、先臣故安豊太守、関中侯叡之孫、先臣故散騎侍郎準之遺女。外出自先臣故尚書左丞孔胄之外曾孫、先臣故侍中、関内侯夷之外孫女。

皇帝の嘉命があり、使者某がやってきて、重ねて宮中の詔を宣べ、臣が名族であるかを問うた。臣の一族の娘は、父母の生む所、先臣の故光禄大夫・零婁侯禎の遺玄孫であり、先臣故豫州刺史・関中侯暉の曾孫、先臣故安豊太守・関中侯叡の孫、先臣故散騎侍郎準の遺女である。母方の出自は、先臣故尚書左丞孔胄の外曾孫であり、先臣故侍中・関内侯夷の外孫の娘である。

とある。このような文言は、一族の中から皇后を出す場合において、宮中と儀礼的に交わされたようであるが、何氏が当時名族のひとつであったことは確かであろう⁹。

何準に育てられたこともあり、王弘之は、当時の高官で同じ琅邪王氏の王献之や、太原

王氏の王恭に知られ、尊重された。隆安中（397 - 401）には、琅邪王中軍参軍、遷って司徒主簿などの官職に就いた。その後も、烏程令、桓謙の参軍となり、荊州刺史桓偉によって南蛮長史、義熙（405 - 418）初めには、何無忌によって右軍司馬に徴されている。その他、劉裕によって、徐州治中從事史・員外散騎常侍、当時吏部尚書であった族兄王敬弘の奏上によって太子庶子、太祖文帝の即位後、王弘之最晩年の元嘉 4 年（427）にも通直散騎常侍に徴されたが、これらの官職には就かなかつた。

以上で述べたように、王弘之はその生涯の前半においては官職にも就いているので、隱逸として認識され、名声を得るようになったのは晩年になって以後、しかも族兄の王敬弘（360 - 447）¹⁰や、王弘之と交流のあつた謝靈運（385 - 433）ら高官の力によるところが大きい。

王敬弘が、王弘之を朝廷に推薦する際、『宋書』卷 93、隱逸、王弘之（2282 頁）に、
前員外散騎常侍琅邪王弘之、恬漠丘園、放心居逸。前衛將軍参軍武昌郭希林、素履純潔、嗣徽前武。並擊壤聖朝、未蒙表飾、宜加旌聘、賁于丘園、以彰止遜之美、以祛動求之累。

前員外散騎常侍琅邪王弘之は、心安らかに隱逸しており、自由にのびのびと隱居している。前將軍参軍武昌郭希林は、質朴にして純潔であり、前人の美德を受け継いでいる。どちらも聖朝で平和な暮らしを楽しみ、いまだに朝廷に任用されていない。旌聘を加えて任用し、隱逸の士を光り輝かせ、以て彼らの謙遜の美を表彰し、名利を求め悪弊を除去するべきである。

とあり、また、『宋書』卷 93、隱逸、王弘之（2282 頁）に、

弘之高行表於初筮、苦節彰於暮年、今内外晏然、当修太平之化。宜招空谷、以敦冲退之美。

王弘之の高尚な行動は、はやくから明らかであり、その苦節は暮年にさらに明らかである。今内外は晏然であり、まさに太平の化を修めるべきである。空谷（隱逸の士）を招き、以て利益に淡白で謙讓する美德を敦くすべきである。

とあり、王弘之が隱逸的な性質において優れていることを繰り返して強調している。

また謝靈運は、廬陵王の劉義真に差し出した箋の中で（『宋書』卷 93、隱逸、王弘之、2282 頁）、

会稽既豊山水、是以江左嘉遁、並多居之。但季世慕榮、幽棲者寡、或復才為時求、弗獲從志。至若王弘之扠衣歸耕、踰歷三紀、孔淳之隱約窮岫、自始迄今、阮万齡辭事就閑、纂成先業。浙河之外、棲遲山沢、如斯而已。既遠同義、唐、亦激貪厲競。殿下愛素好古、常若布衣、每意昔聞、虛想巖穴、若遣一介、有以相存、真可謂千載盛美也。会稽は豊かな山水があるので、江左の人々は隱遁を楽しみ、みな多くここに居している。ただ、今は末世なので人々は榮誉を慕い、幽棲する者が少なく、ある人は官職に就き、志に従うことができない。王弘之は、衣を扠って歸耕すること三紀を超え、孔淳之は、隱棲して岫を窮めること始めより今まで、阮万齡は、仕官を辞して閑に就く

こと先業からである。浙河の外、山沢に棲遅しているのは、このようなもののみである。彼らの節操は、伏羲・唐堯の時代に比すべきであり、また官職を貪り競争するものたちへの教訓となるものだ。殿下は、素朴なものを愛し、古を好み、常に庶民のようである。常に昔の伝聞を思い、隠逸の生活を虚心に想っている。もし一人の使者を派遣して、彼ら隠逸を慰問することができれば、真に千載の盛美と謂うべきである。と言い、会稽に隠遁するものたちの中でも、王弘之や孔淳之らを本来の隠遁の意に違わない人物として、挙げている。王敬弘や謝靈運らによる、こうした協力がなければ、王弘之の隠逸としての名声は、当時の世論の中にも浸透しなかったであろう。

王弘之の居は、会稽郡上虞県にあった。『宋書』卷 93、隠逸、王弘之（2282 頁）に、
家在会稽上虞。（中略）性好釣、上虞江有一処名三石頭、弘之常垂綸於此。（中略）日夕載魚入上虞郭、經親故門、各以一兩頭置門内而去。

家は会稽上虞にあった。（中略）性格は魚釣りを好んだ。上虞江に、名は三石頭というところがあり、王弘之は常に釣り糸をここで垂らしていた。（中略）日夕魚を積載して上虞の城内に入り、親故の門を経ては、それぞれ魚 1、2 匹を門内に置いて去った。とあり、王弘之はいつも上虞県の三石頭において釣りをしては、得た魚を上虞県の城内に住む親類や、古くからの友人に配っていた。また王弘之の兄である王鎮之（357 - 422）の伝（『宋書』卷 92、良吏、王鎮之、2262 - 2263 頁）には、

王鎮之字伯重、琅邪臨沂人、徵士弘之兄也。（中略）父随之、上虞令。鎮之初為琅邪王衛軍參軍、出補剡、上虞令。（中略）以母老求補安成太守。（中略）母憂去職、在官清潔、妻子無以自給、乃棄家致喪還上虞旧墓。

王鎮之、字は伯重、琅邪臨沂の人、朝廷が徵した王弘之の兄である。（中略）父の随之は、上虞令であった。王鎮之は、初め琅邪王軍行參軍となり、地方に出て剡・上虞令になった。（中略）母の老を以て、求めて安成太守となった。（中略）母の憂に遭い職を去ったが、在官中は清廉につとめたので、妻子を養うことができず、家を棄て、母の棺を上虞の古墓に還した。

とあり、王弘之の一族は代々上虞県に居住しており、上虞県の城内には、親類や古くからの友人も居していたことがわかる。また王弘之が釣りをしていた三石頭は、その城内からも遠くない場所にあった。王鎮之は、母の喪に際しては最終的に上虞県の旧墓に葬ったともあり、これらのことから、王弘之・王鎮之の一族の生活基盤は上虞県にあったといえるだろう。

一方、前に引いた『宋書』卷 93、隠逸、王弘之伝（2282 頁）には、

始寧沃川、有佳山水、弘之又依巖築室。謝靈運、顔延之並相欽重。

会稽郡始寧は川が肥沃で、よい山水があった。王弘之は、また巖に拠って室を築いた。

謝靈運・顔延之とお互い欽重した。

ともあり、王弘之は会稽郡始寧県にも室を築いていた。謝氏は、謝玄（343 - 388）のころには会稽における土地経営が確立しており、始寧県にも、代々の墓や故宅・別墅を置いて

いた。『宋書』卷 67、謝靈運（1754 頁）に、

靈運父祖並葬始寧県、并有故宅及墅、遂移籍会稽、修営別業、傍山帶江、尽幽居之美。与隠士王弘之、孔淳之等縦放為娛、有終焉之志。

謝靈運は、父祖みな始寧県に葬られ、あわせて故宅及び別墅を有していた。ついに籍を会稽に移し、別業を修営した。山に沿い江をめぐらせ、幽居の美を尽くした。隠士王弘之・孔淳之らとともに気ままに楽しみを為し、終焉の志を有した。

とある。このように王弘之と謝靈運との間に親交があったために、謝氏の縁地である始寧県に、王弘之は室を築いたのだと考えられる。

以上のように、王弘之は会稽郡を中心にして、謝氏・孔氏・何氏とも密接な関係を保ちながら生活していた¹¹。

3 孔淳之（372 - 430）

孔淳之は、字は彦深、『宋書』卷 93、『南史』卷 75 の隠逸伝に伝があり、魯郡魯県の人である。『宋書』の記載によれば、咸安 2 年（372）に生まれ、元嘉 7 年（430）に没した。居は、会稽郡剡県にあった。

父の孔粲は、秘書監に徴されたが就かなかった¹²。孔淳之も古い書物を好み、通俗的なことにはなじまず高尚であったので、当時の高官であった太原王氏の王恭の称するところとなった。山水を好み、遊山の折に出会った僧の法崇とも親交を結んだ¹³。

また、『宋書』卷 93、隠逸、孔淳之（2284 頁）に、

服闋、与徴士戴顓、王弘之及王敬弘等共為人外之游。敬弘以女適淳之子尚。

喪があけて、朝廷が徴士した戴顓、王弘之及び王敬弘等と共に人外に游した。王敬弘は、娘を孔淳之の子の尚に嫁がせた。

とあり、戴顓・王弘之・王敬弘と謝靈運（前に引用した『宋書』卷 67、謝靈運、1754 頁）に「与隠士王弘之・孔淳之等縦放為娛」とある）とも親交があったことがわかる。また孔淳之の子の孔尚は、王敬弘の娘と婚姻関係にあるから、孔淳之は王氏一族とは姻戚関係にもあった。この婚姻に関しては、『南史』卷 24、王裕之（651 頁）に、

上将為廬陵王納其女、辞曰「臣女幼、既許孔淳之息」。

上（武帝）は、廬陵王（武帝の次男義真）の為に、王敬弘の娘を嫁がせようとしたので、辞退して「臣の娘は幼く、また既に孔淳之の子息の許婚である」と言った。

とあり、皇帝の意向であっても介入できなかったことが述べられている。王氏と孔氏の両族間において、このような婚姻は重要な意味を有していたと考えられる。王敬弘の出身である琅邪王氏が当時有力であったように、孔淳之の一族も相応な影響力を持っていたことを以下に述べる。

孔淳之の弟の孔黙之は、散騎常侍・尚書右丞・尚書左丞等の官職に就き、元嘉 6 年（429）には、広州刺史となった人物である¹⁴。孔黙之に関しては、その子孔熙先（- 445）の伝（『宋

書』卷 69、范曄附孔熙先、1820 頁) のなかに、

魯国孔熙先博学有縦横之才志、文史星算、無不兼善。(中略) 初熙先父默之為広州刺史、以贓貨得罪下廷尉、大將軍彭城王義康保持之、故得免。(中略) 曄外甥謝綜、雅為曄所知、熙先嘗經相識、乃傾身事綜、与之結厚。熙先籍嶺南遺財、家甚富足。

魯国の孔熙先は、博学にして縦横の才志があった。その知識は文史星算にわたり、不得意なものではなかった。(中略) 初め孔熙先の父の默之は広州刺史であったが、贓貨によって罪を得、廷尉に下った。大將軍彭城王義康は、孔默之を擁護したので、放免となった。(中略) 范曄の外甥謝綜は、もともと范曄に知られており、孔熙先は、嘗て面識を持ち、一心に謝綜に事え、これと交友を厚く結んだ。孔熙先は、嶺南の遺産によって、家はとても豊かだった。

とあり、孔默之が広州刺史であったころにはすでに財を蓄え、この財は、孔熙先のころには一家の経済的なもとでとなっていたと考えられる。おそらく、孔氏一族は、嶺南の地域に土地所有による経済的な活動を展開していたのではないだろうか。『晋書』卷 90、良吏、吳隱之 (2341 頁) には、

広州包帯山海、珍異所出、一篋之宝、可資数世、然多瘴疫、人情憚焉。唯貧窶不能自立者、求補長史、故前後刺史皆多贖貨。

広州は、山に囲まれ海に臨み、珍異な物品が産出される場所である。一箱の宝であり、数世の資財をつくる地でもある。しかし、瘴疫が多く、人情はこの地を憚る。ただ貧しく自立できない者は、求めて長史になりたがる。そのため、前後刺史はみな貪汚にして多く賄賂を得る。

とあり、広州が山・海に囲まれ物質的には豊かな地であるうえに、広州刺史のなかには、賄賂によって不正な収入を得るものも少なからずいたようである。

范曄の外甥であった謝綜は、謝靈運の従弟にあたる人物である。孔熙先が「贓貨」の罪に問われた際に、孔默之を保護し守った人物である彭城王義康は、武帝の四男で、孔熙先と「相識」であった謝綜の父である謝述 (400 - 445) は、劉義康の長史であった。「義康、之 (謝述) を遇すること甚だ厚し」¹⁵とあり、孔熙先と謝綜は両者の父がともに義康に重用された人物だったことがわかり、このような孔氏と謝氏とのつながりから、孔熙先と謝綜が「相識」であったのだと考えられる¹⁶。

また、『宋書』卷 93、隱逸、孔淳之 (2284 頁) には、

元嘉初、復徵為散騎侍郎、乃逃于上虞県界、家人莫知所之。

元嘉初め、再び徴して散騎侍郎にしようとした。すると、上虞県界に逃げ、家人ですら行く所を知るものはなかった。¹⁷

とある。孔淳之は、劉宋文帝の元嘉年間 (424 - 453) の初め、散騎侍郎に徴されたが就かず、会稽郡上虞県へと逃れ隠れた。このことから、孔淳之は上虞県にも地縁を持っていたか、もしくは地縁を持つ人物と親しい関係にあったと考えられる。一方で、上虞県といえ、前述の王弘之の家が在した土地である。また、上虞県の城内には、王弘之の親類も居

住していた。孔淳之の子は、王弘之の従兄である王敬弘の娘を妻としていることは前述の通りであり、このような縁を頼って、孔淳之が剡県から上虞県に移ったと考えれば、孔淳之の上記のような行動も不自然ではないだろう。

謝靈運や謝綜と同族である謝方明は、劉宋の初めごろ、丹陽尹から会稽太守に転じた¹⁸。謝方明の子である謝惠連と謝靈運は、『南史』巻 19、謝靈運（539 頁）に、

時方明為会稽、靈運造方明、遇惠連、大相知賞。靈運性無所推、唯重惠連、与為刎頸交。

当時、謝方明は会稽太守だったので、謝靈運は謝方明のもとに至り、謝惠連に会った。大いにお互いを賞賛してもてなした。謝靈運は、人を尊ぶ性格ではなかったが、ただ謝惠連だけは重んじ、ともに刎頸の交わりを為した。

とある。また、『宋書』巻 93、隱逸、孔淳之（2284 頁）には、

会稽太守謝方明苦要入郡、終不肯往。

会稽太守謝方明は、（孔淳之に）郡で仕官することを強く望んだが、（孔淳之は）終に行かなかった。

とある。会稽太守となった謝方明は、子の謝靈運と「刎頸の交」であった同族の謝靈運、そして、謝靈運と親交のあった孔淳之をよく知っていたのであろう。

以上のことから、孔淳之の一族は嶺南地域を基盤とした財産があり、また、当時有力であった陳郡謝氏や琅邪王氏とも、血縁的・地縁的・政治的な関わりがあったと考えられる。

郷里において属する一族が有力でかつ名声があったことは、上記の戴顛・王弘之・孔淳之に共通していることで、戴顛・王弘之・孔淳之が有していた、属する一族に付随する名声は、實際上彼らの代に新たに認められたものではない。一族に有力者が存在することで、得られた名声であり、隱逸としての名声ですら、彼ら隱逸と世間との密接なつながりが無ければ得られなかったものである。彼ら自身の代に政治権力との関わりをなかで確立した隱逸という名声が大きな力を持ったことは、明らかであるが、その前段階として父祖の郷里での名声や、一族の中の政治的有力者の存在が、彼らが得た隱逸という名声に大きく関係していたことは否定できない。

隱逸と世間との関わりは、以下のようにある。

『宋書』巻 93、隱逸、王弘之伝には、前述の通り、昼夕に魚を積んで上虞県の城内にはいり、親類や古くからの友人の家の門を過ぎるごとに、それぞれ魚を門内に置いて去ったということが述べられており、また、『南史』巻 75、隱逸、孔淳之（1864 頁）に、

会稽太守謝方明苦要之不能致、使謂曰、苟不入吾郡、何入吾郭。

会稽太守謝方明は、孔淳之に仕官させようと強く望んだが、できず、使者を出して、「どうして吾が郡の求めは断るのに、吾が郡の城内には入城するのか」と言った。

とある。このことから、王弘之は上虞県城付近に住み、城内にも頻繁に出入りしていたこと、孔淳之も会稽の郡府に仕えることはなかったが、その城内とは行き来があったことが

わかる。すなわち、彼らの生活は、決して都市と離れて成り立っていたものではない。

隠逸や、隠逸と交流していた官人・知識人たちの「山を好む」という性質も、政治権力から逃れるという目的があつてのものではなく、会稽付近の山水自体が、政治的にも経済的にも、当時すでに彼らの世間のうちに内包されていたためと考えられる。前掲の、謝靈運が廬陵王の劉義真に差し出した箋の中に、会稽の山水に隠遁する者は多いけれども、みな栄華を慕い、折りにふれては職を求め、とあることも、会稽山が、単に俗世間を避けた隠逸の山という性格のみを有する土地ではなかったことを示している。

会稽山に関わりの深かった隠逸として、戴顒・王弘之・孔淳之を挙げたが、彼らには相互の関わりがあつて、また、官人であつた王敬弘、謝靈運も彼ら隠逸の交流関係に含まれていたことは、前述のとおりである。戴顒・孔淳之・王弘之・王敬弘・謝靈運を中心とした、会稽山において見られる交友関係は、隠逸というよりも、当時の名声ある知識人の集まりとみなすことが出来よう。

第2節 王氏と謝氏を中心とした知識人集団とその交流関係

『宋書』巻93、隠逸伝に名のある戴顒・王弘之・孔淳之と彼らと関わりの深かった官人として、謝靈運・王敬弘について先に述べたが、隠逸と王氏、謝氏の関わりは、彼らの代から会稽において始まったものではない。先述の隠逸たちが会稽で活躍する二、三世代前、同じく会稽で活躍した知識人のグループとして、王羲之・謝安を中心とする集団をあげることができる。

1 王羲之 (321 - 379) と謝安 (320 - 385)

王羲之は『晋書』巻80に伝があり、『晋書』によれば、太興4年(321)に生まれ、太元4年(379)に没した。琅邪臨沂の人で、王導(276 - 339)は、王羲之の父王曠のいとこにあたる。王羲之は、先述の王弘之の祖父にあたる人物である。

秘書郎で起家し、江州刺史、会稽内史などの職についたが、永和11年(355)、王羲之は病気と称して郡を去り、官職を辞した。

隠居後の生活については、『晋書』巻80、王羲之(2101頁)に、

羲之既去官、与東土人士尽山水之游、弋釣為娛。又与道士許邁共修服食、採藥石不遠千里、徧游東中諸郡、窮諸名山、泛滄海、嘆曰「我卒當以樂死」。謝安嘗謂羲之曰「中年以来、傷於哀樂、与親友別、輒作数日惡」。羲之曰「年在桑榆、自然至此。頃正頼采竹陶写、恒恐兎輩覺、損其歡樂之趣」。朝廷以其誓苦、亦不復徵之。

王羲之は既に官を去り、東土(会稽)の人士と山水の游を尽くし、弋釣して楽しんだ。また、道士許邁とともに道教の服食を修め、藥石を採るのに千里を遠しとせず、東中の諸郡に游し、諸名山をきわめ、滄海に舟を浮かべ、嘆じて「私は卒すとき、楽しみ

ながら死にたい」といった。謝安は、嘗て王羲之に「中年以来、喜怒哀楽によって心身が傷む。親友と別れれば、数日間、心身の調子が悪くなる」と言った。王羲之は、「年齢が晩年にいたると、自然にそうなる。この頃は管弦楽を頼って憂いをはらしているが、常に児輩が目を覚まし、歓楽の趣を損なうことを恐れている」と言った。朝廷は、その誓を重く思い、再びこれを徴さなかった。

とある。この記事は、永和 11 年（355）に辞職した後の王羲之についてのもので、これによれば王羲之は、会稽の山水において近辺の人士と狩や魚釣りをし、道士の許邁¹⁹と服食（道教の養生法の一つで、丹薬を服用する）を修め、そのための薬石を採集して名山や水辺を巡った。このような行動を王羲之は「楽」と言い、朝廷によって「歓楽の趣」が損なわれることがないように、謝安（320 - 385）を通して朝廷に忠告した。

『晋書』巻 79、謝安（2073 頁）に、

及万黜廢、安始有仕進志、時年已四十余矣。

謝安の黜廢されるにいたって、謝安は始めて仕進の志を持った。年齢は、すでに四十余歳であった。

とあるため、前掲の記事に登場する謝安は三六歳、未だ仕官せず官職からは離れていた時期であったと考えられるが、朝廷との関係はあったようである²⁰。

ただし、王羲之には、仕官していた時期から隠逸の風があった。永和 9 年（353）、会稽郡山陰県にある蘭亭で催された宴は、有名である。『晋書』巻 80、王羲之（2098 - 2099 頁）に、

羲之雅好服食養生、不樂在京師、初渡浙江、便有終焉之志。会稽有佳山水、名士多居之、謝安未仕時亦居焉。孫綽、李充、許詢、支遁等皆以文義冠世、並築室東土、与羲之同好。嘗与同志宴集於会稽山陰之蘭亭、羲之自為之序以申其志、曰「永和九年、歲在癸丑、暮春之初、会于会稽山陰之蘭亭、修禊事也。群賢畢至、少長咸集。（下略）」王羲之は、非常に服食養生を好み、京師にいることを楽しまず、初めて浙江に渡ったとき、この地で一生を終える志を持った。会稽にはよい山水があって、名士が多くここに居していた。謝安がまだ仕官していなかったとき、ここに居していた。孫綽・李充・許詢・支遁等らは、みな文義を以て世に秀でていた。みな会稽に室を築き、王羲之と趣向を同じくした。かつて同志と会稽山陰の蘭亭に宴して集まった。王羲之は、自らこの序を作ってその志を述べ、「永和 9 年（353）、癸丑の年、暮春の初め、会稽山陰の蘭亭に会し、禊禊の事を修めた。群賢、畢く至り、少長、咸な集まる」と言った。（下略）」と述べている。

とあり、辞職する以前から、会稽の山水を好み、謝安、李充らの官人や、許詢、支遁らの官職に就いていない知識人たちと交流していた。

謝安（320 - 385）は、東晋の高官であり、謝靈運の曾祖父の兄にあたる人物である。陳郡陽夏の人で、若い頃から名を重んぜられていたが、官職に徴されても就かず、会稽に住んで、四十余歳ではじめて仕官するまで、朝廷との関係を保ちつつも、自適な生活を送っ

ていた。『晋書』卷 79、謝安（2072 - 2073 頁）には、

寓居会稽、与王羲之及高陽許詢、桑門支遁遊処、出則漁弋山水、入則言詠属文、無処世意。（中略）安雖処衡門、其名猶出万之右、自然有公輔之望、処家常以儀範訓子弟。安妻、劉惔妹也、既見家門富貴、而安独静退、乃謂曰「丈夫不此如也」安掩鼻曰「恐不免耳」。

会稽に寓居して、王羲之及び高陽の許詢や桑門（僧侶）の支遁とともに遊んだ。屋外に出ては、山水で魚や鳥を捕り、屋内では、詩を詠じ文をつづって、出仕の意を持たなかった。（中略）謝安は、隠居していても、その名は謝万の右に出ており、自然と宰相の器としての名望を備えていたので、家でも常に儀範を以て子弟に教えた。謝安の妻は、劉惔の妹である。家門の富貴を見ていたので、謝安が独り静かに隠居している様に対し、「丈夫がこのようでもいいのでしょうか」と言った。謝安は鼻を掩い小声で、「仕官すると禍を免がれることができないのが怖い」とつぶやいた。

とあり、仕官する以前の謝安は、山水に遊びながらも、政治権力と関わらざるを得ない状況にあり、その圧力を受けていたことがわかる。前掲の記事で、隠居後の王羲之が、未だ仕官していない謝安を通じて朝廷に忠告を与えることが出来たのもこのような背景があったためであろう。前掲の『晋書』卷 79、謝安伝（2074 頁）には、

嘗与王羲之登冶城、悠然遐想、有高世之志。

かつて王羲之とともに冶城に登り、悠然として遙か遠くに想いを致し、俗世から超越する志を持った。

ともあり、王羲之と謝安は、官職から離れた時期においても、政治権力との兼ね合いのもと、山水において交流していたことがわかる。

2 王羲之・謝安以後

謝安の頃には、王氏と謝氏の間には婚姻関係も結ばれており、両族は相互に関わりが深かったといえるが、王羲之より一世代降って、王導の孫にあたる王珣（350 - 401）と謝安の間に仲違いが生じた。原因や正確な時期は不明であるが、謝安の晩年の頃であると考えられる。『晋書』卷 65、王導附王珣（1756 頁）には、

珣兄弟皆謝氏壻、以猜嫌致隙。太傅安既与珣絶婚、又離珣妻、由是二族遂成仇讐。

王珣の兄弟は皆謝氏の娘壻であったが、猜嫌することがあって仲違いをした。太傅謝安は、王珣と婚姻関係を断絶したあと、また王珣（王珣の弟）とその妻を離縁させた。

このことで、両族は遂に互いに憎しみ合うようになった。

とあり、王珣の兄弟が皆謝氏の娘婿であったが、離縁することになったために王氏と謝氏は仲違いをした。しかし、この両族の仲違いは謝安と王珣による一時的なものであったように思われる。謝安が没すると、すぐに王珣側から両族の関係修復がはかられた。前掲『晋書』卷 65、王珣伝（1757 頁）には、

初、珣既与謝安有隙、在東聞安薨、便出京師、詣族弟献之、曰「吾欲哭謝公」。献之驚曰「所望於法護」。於是直前哭之甚慟。

初め、王珣は、すでに謝安と仲が良くなかったが、会稽で謝安が薨じたのを聞き、京師に出て、族弟の王献之のもとに行き、「私は謝公の霊に哭したい」と言った。王献之は、驚いて「法護（王珣の幼名）に望む所である」と言った。ここで謝安の霊の前に直ちに進んで哭し、ひどく悲しんだ。

とあり、謝安の死後すぐに王珣は族弟である王献之を訪ねて、王献之も王珣に対して望んでいた通り、謝安の死を弔い、礼として泣いた。なぜ、謝安の死後、すぐに王珣が王献之のもとを訪れたかといえ、おそらく、王氏の中では最も王献之が当時謝安に気に入られていた人物だったからであろう。王献之（344 - 386）は、東晋の高官で、前述の王羲之の子である。『晋書』卷 80、王羲之附王献之（2104 - 2106 頁）には、

嘗与兄徽之、操之俱詣謝安、二兄多言俗事、献之寒温而已。既出、客問安王氏兄弟優劣、安曰「小者佳」。(中略)謝安甚欽愛之、請為長史。(中略)及安薨、贈礼有同異之議、惟献之・徐邈共明安之忠勲。(中略)孝武帝遂加安殊礼。

王献之は、かつて兄の王徽之・王操之とともに謝安を訪ねた。二兄は俗事を多く言ったが、王献之は気候の寒温のみ言った。出てから、客が謝安に王氏兄弟の優劣を問うた。謝安は、「小さい者がよい」と言った。(中略)謝安は王献之を欽愛し、望んで長史とした。(中略)謝安が薨じたとき、贈礼の議論が定まらなかったが、王献之と徐邈だけは共に謝安の忠勲を明らかにした。(中略)孝武帝はついに謝安に殊礼を加えた。

とあり、王献之は若いころから兄弟の中では謝安に最も佳とされ、後に謝安の長史となり、謝安の死後に至っても、謝安の位望を保つことに力を尽くしている。

このように、謝安の没後には、再び両族の協力体制がとられるようになった。383 年の前秦との淝水の戦いによる功を立ててから、謝氏の家格はそれ以前とは異なり、王氏と肩をならべる程になっていた。また謝安が隠れ住んだ東山は会稽郡上虞県にあり、後に王弘之が上虞に拠っていることは、先述の通りである。政治的な側面からみても、会稽における土地経営の面から見ても、当時王氏は謝氏と協力することには意義があったといえよう。

また、王珣と、謝安の甥にあたる謝玄との間には、もともと関連があった。『晋書』卷 65、王導附王珣（1756 頁）には、

弱冠与陳郡謝玄為桓温掾、与俱為温所敬重、嘗謂之曰「謝掾年四十、必擁旄杖節。王掾当作黒頭公。皆未易才也」。

王珣は弱冠にして、陳郡謝玄とともに桓温の掾となり、ともに桓温の敬重する所となった。つねに「謝掾（謝玄）は、必ず年四十にして旄節を擁す。王掾（王珣）は文人として高位の人となる。どちらも得がたい才である」と言った。

とあり、王珣と謝玄はともに桓温の掾となって重んぜられ、文武において二人がそれぞれ活躍するであろうと桓温が評した。

以上のような記事から、王羲之・王献之親子と王珣・王珣兄弟、また謝安、謝玄の相互

の関わりを読み取ることができるだろう。

そして、王珣と謝玄の二人は、また、同様に戴逵に関わっていることに注目したい。戴逵は、前述の戴顓の父にあたる人物である。『晋書』巻94、隱逸、戴逵（2458 - 2458 頁）には、

孝武帝時、以散騎常侍、国子博士累徵、辞父疾不就。郡县敦逼不已、乃逃於吳。吳国内史王珣有別館在武丘山、逵潜詣之、与珣游处積旬。会稽内史謝玄慮逵遠遁不反、乃上疏曰「伏見譙国戴逵希心俗表、不嬰世務、棲遲衡門、与琴書為友。雖策命屢加、幽操不回、超然絕跡、自求其志。且年垂耳順、常抱羸疾、時或失適、轉至委篤。今王命未回、將離風霜之患。陛下既已愛而器之、亦宜使其身名並存、將請絕其召命」。疏奏、帝許之、逵復還剡。

孝武帝の時、戴逵は、散騎常侍や国子博士にたびたび徴せられたが、父の病のためと称し辞退して就かなかった。郡県は、熱心に逼ることをやめなかったため、吳に逃げた。吳国内史王珣は、別館を有しており武丘山にいた。戴逵は潜かに王珣を訪ね、王珣と遊ぶこと旬を重ねるに及んだ。会稽内史謝玄は、戴逵が遠く遁れて戻らないのを憂慮して、上疏して「伏して見たところ、譙国の戴逵は心に世俗のことが無く、世務（俗事）に関わらず、質素な茅屋に隠棲し、琴書を友としている。策命がたびたび加えられるが、隱遁の節操は曲げず、超然として跡を絶ち、自らその志を求めている。かつ年齢も耳順（60歳）に垂んとし、常に疾病を抱え、ひとたび身体に不都合が生じれば、生命の危険におよぶ状況である。今、王の命はまだ撤回されておらず、まさに艱難困苦に遭遇しています。陛下が戴逵の才を愛し器とするなら、またその身と名をどちらも保たせるべきであり、召命の思いを放棄するよう要求します」と言った。疏奏し、帝はこれを許した。戴逵は復た剡に還った。

とあり、官職を避けて吳に逃れた戴逵を、吳国内史であった王珣と会稽内史であった謝玄が、助けている。王珣が吳国内史となったのは、謝安の死後のことであり²¹、謝氏と王氏の両族間における仲違いもおおむね解消していたと考えられる。戴逵は王珣の武丘山の別館に「潜かに詣る」とあるが、おそらく謝玄は戴逵の居所を知っていたのだろう。

さらに、戴逵の弟である戴蒨は、謝玄に従い符堅の軍を防いでいる²²。ここにおいて、王氏、謝氏と戴兄弟の関わりが浮かび上がってくるのである。

以上で述べたことをまとめると、まず、王羲之と謝安の間に親交があり、その次の代（子の代）になると、王珣・王珣兄弟、王献之、謝玄のつながりに加えて、戴逵・戴蒨兄弟とのつながりも目立つようになる²³。このような王氏、謝氏、戴氏の政治的なつながりは、またその次の代以降、会稽において知識人が集結する核となったといえるだろう。さらに、会稽山における官人や官人以外の知識人たちの交流は、正史に見られるような隱逸的精神のみで行われていたとは考えにくい。交流の基盤がもともと政治的なつながりであった以上、その後の王敬弘・王弘之・謝靈運・戴顓・孔淳之らの交流にも少なからず政治的意図があったといえるのではないだろうか。

本章では、東晋末から劉宋初にかけての会稽における知識人の交流を探るため、まず、第一節において『宋書』の隱逸伝の中に記載があり、会稽の山水で活躍していたことが明確な(1) 戴顒、(2) 王弘之、(3) 孔淳之の3名の交流の実態について述べ、次に、第2節で、第1節で述べた3名の隱逸と関連が深かった琅邪王氏・陳郡謝氏と、隱逸との交流のはじまりを、東晋にさかのぼって王羲之・謝安の会稽の山水における交流関係に求めた。

第1節では戴顒・王弘之・孔淳之がみな有力な一族の出身であることが確認でき、戴顒は、三吳地方に広く影響力を有し、孔淳之は、広州の地に一族の経済的基盤があったと考えられることを述べた。一族が有力であるためのこれらの政治的・経済的基盤は、婚姻関係によって支えられている部分も大きく、このような婚姻関係が隱逸と官人の交流関係に影響した。

第2節では、第1節で述べた隱逸が活躍する二、三代以前に遡り、王羲之・謝安の交流を中心として考察し、戴顒・王弘之・孔淳之らの交流が彼らの代から始まったものではないことを述べた。王羲之・謝安ともに隱逸的気風の強い人物であり、会稽等の山水において官職についていない知識人とも親しく交流していたが、王羲之・謝安が官職に就いておらず、隱遁している時期にも朝廷との関連は保たれている。これは、山水が単なる自然の山とは異なる、人為的な知識人の交流の場でもあったことを示している。王羲之・謝安の交流を基盤として、戴氏一族も関連し、その後『宋書』の隱逸伝に見られるような知識人の交流関係へと発展していく。

会稽の山水は、点在する盆地に豊富な資源を有しており、経済的にも有利な土地であった²⁴。謝氏が会稽において別業を設け、土地の占有を展開して利益を得ていたことは先行研究からも明らかであるが、第1節で述べたように、王氏も会稽の上虞県を拠点のひとつとしており、王氏も謝氏と同様に会稽において経済的活動を展開していたと考えられる。会稽の地に勢力をもつ有力な一族たちにとっては、山水という面においてもそれぞれの経済的利益を守ることは重要な課題のひとつであったといえる。そして、そのような有力な一族たちの協力体制の一端が表出しているのが、隱逸たちの交流であった。

一見、政治とは無関係な隱逸であるが、ここで取り上げた人物は、みな有力な一族の出身であり、そのため、彼らの一族の中には高い官職に就いているものも少なくない。山水における隱逸たちの交流に、官人がしばしば登場する所以である。

会稽の山水は、重要な経済的基盤と成り得たために、山水において名声を得て活躍することができた隱逸という存在は、会稽の山水を経済的拠点としようとする一族には必要な存在だったのではないだろうか。会稽の山水における、利害を同じくする有力な一族同士の協力体制を維持するために、このような一族は婚姻関係を結んでいた。そして、有力な一族に属する隱逸や知識人同士の交流も盛んになっていき、このため、隱逸が親しい続柄の官人によって、広く世間に知らされ名声を得ることはしばしば見られることとなった。

以上のように、当時政治的にも経済的にも、一族同士の婚姻を含む協力体制は重要な意味を持っていた。戴顛・王弘之・孔淳之は共通して有力な一族に属しており、隠逸同士の交流だけでなく、一族同士の交流は、政治的な場面においても、数世代以前から見られる。

また、戴顛・王弘之・孔淳之の一族はみな会稽に地縁があり、会稽の豊かな山水を利用した土地経営も行っていたと考えられる。

会稽の山水においては、廬山の山水において見られるような官人と隠逸を直接的に結びつける、知識人たちによる組織は確認できなかった。そのかわりに、以上で述べたような、一族同士の政治的・経済的協力体制が、隠逸たち非官人と官人を結びつける要因となっていたのであり、この点においては、廬山の山水と性質を異にしている。そしてまた、会稽の山水の地は、有力な一族の経済的基盤となっていたために、山水という分野で重要な役割を果たす隠逸は、一族にとって欠くことのできない存在であった。

以上のような理由によって、本章では、有力な一族同士の協力体制と、彼らの会稽における土地経営を直接的な背景として、知識人たちのコミュニティが会稽の山水に成立したと考える。

注

- 1 大室幹雄『園林都市—中国中世の世界像』、1985年、東京・三省堂。
- 2 劉淑芬「六朝会稽士族」、『中央研究院歴史語言研究所集刊』56-2、1985年、285-327頁。
- 3 高畑常信「王羲之の思想と隠逸」、『東京学芸大学紀要 二部門』34、1983年、197-207頁。
- 4 『論語』微子第十八に「楚狂接輿歌而過孔子曰『鳳兮、鳳兮、何徳之衰。往者不可諫、來者猶可追。已而、已而、今之從政者殆而』」とあり、また「逸民伯夷、叔齊、虞仲、夷逸、朱張、柳下惠、少連。(中略)我則異於是、無可無不可」とあるように、孔子は為政者や君主を見極めて仕えるべきであると説く。
- 5 『晋書』卷91、儒林、范宣(2360頁)に「范宣字宣子、陳留人也。(中略)小尚隱遁、加以好學、手不釋卷、以夜繼日、遂博綜衆書、尤善三禮。(中略)太尉郗鑑命為主簿、詔徵太學博士・散騎郎、並不就。家于豫章。(中略)宣雖閑居屢空、常以講誦為業、譙國戴逵等皆聞風宗仰、自遠而至、諷誦之聲、有若齊魯」とある。
- 6 『宋書』卷93、隱逸、王弘之(2281頁)「少孤貧、為外祖徵士何準所撫育」。
- 7 『晋書』卷93、外戚、何準(2417頁)「高尚寡欲、弱冠知名、州府交辟、並不就」。
- 8 『晋書』卷32、后妃下、穆章何皇后(977頁)「以名家膺選」。
- 9 廬江何氏と琅邪王氏の婚姻は、この他にも例がみられる。王永平「東晋南朝時期廬江何氏与琅邪王氏婚媾交游考—從一个側面看廬江何氏門第与地位得以維系之原因」(『許昌学院学報』27-4、2008年、21-24頁)に詳しい。
- 10 王敬弘(王裕之)は、王弘之の従兄にあたり劉宋の高官であった。王敬弘にも少なからず隠逸の氣風があったようで、『宋書』卷66、王敬弘伝(1729、1732頁)「性恬静、樂山水。(中略)出為吳興太守。旧居余杭県、悦是舉也。(中略)所居舍亭山(在吳興郡余杭県)、林澗環周、備登臨之美、時人謂之王東山」とある。東晋から劉宋にかけて官職を歴任したが、晩年とくに与えられた官職を辞退することもたびたびあった。

- 11 孔淳之の一族は広州に土地を所有し、一族の経済基盤のひとつとしていたと考えられる(第1節第3項で詳述)。王弘之の兄鎮之は、後に広州刺史となっており、孔氏との関連をうかがわせる。
- 12 『宋書』巻93、隱逸、孔淳之(2283頁)、「孔淳之字彦深、魯郡魯人也。祖愔、尚書祠部郎。父粲、秘書監徵、不就」。また『晋書』巻20、礼中(617頁)には「寧康二年(374)七月、簡文帝崩再周而遇閏。博士謝攸・孔粲議(中略)尚書僕射謝安・中領軍王劭(中略)意皆同」とある。
- 13 『宋書』巻93、隱逸、孔淳之(2284頁)、「嘗游山、遇沙門积法崇、因留共止、遂停三載」。『高僧伝』巻4、義解一、竺法崇「後還剡之葛峴山。茅菴澗飲、取欣禪慧。東甌學者競往湊焉。与隱士魯国孔淳之相遇。(中略)自以為得意之交也」。『太平御覽』巻408、人事部、交友3、『王知賢露宋紀』曰、孔淳之隱居剡山、嘗遇桑門法崇於三山。
- 14 『宋書』巻5、文帝本紀(78頁)、「(元嘉6年、429年)七月己酉、以尚書左丞孔默之為広州刺史」。
- 15 『宋書』巻52、謝景仁附謝述(1496頁)、「義康遇之甚厚」。『宋書』巻69、范曄附孔熙先(1821頁)、「綜父述亦為義康所遇、綜弟約又是義康女夫」。
- 16 劉裕の第四子で文帝の弟として権勢を振るった劉義康が、元嘉17年(440)、江州刺史に左遷されたため、劉義康に恩のあった孔熙先は、後に謝綜・范曄らと逆謀を企てた。
- 17 なお、これ以前にも著作佐郎・太尉参軍などに徴されたが就かなかった。
- 18 『宋書』巻53、謝方明(1524頁)、「高祖受命、遷侍中。永初三年(422)、出為丹陽尹、有能名、転会稽太守」。
- 19 『晋書』巻80、王羲之附許邁(2106 - 2107頁)に伝があり、字は叔玄、丹楊句容の人。家は代々「士族」であったが、許邁は若くより恬静で仕官することを好まず、余杭県・柯廬県・臨安などの名山を巡った。『晋書』巻32、后妃下、孝武文李太后(981頁)には、「時徐貴人生新安公主、以德美見寵。帝常冀之有娠、而彌年無子。会有道士許邁者。朝臣時望多称其得道。帝從容問焉、答曰『邁是好山水人、本無道術、斯事豈所能判。但殿下德厚慶深、宜隆奕世之緒、当從屬謙之言、以存広接之道』帝然之、更加採納」とあり、当時の朝臣の間で「時望」があり、皇帝にも採納されている。朝廷内でも大きな影響力を持っていた人物である。
- 20 『晋書』巻79、謝安附謝万(2087頁)、「万既受任北征、(中略)自率衆入渦潁、以援洛陽。北中郎將郗曇以疾病退還彭城、万以為賊盛致退、便引軍還、衆遂潰散、狼狽单帰、糜為庶人」とあり、『晋書』巻13、天文下(376頁)、「(升平三年十月)豫州刺史謝万入潁、衆潰而帰、万除名。十一月、司徒会稽王以郗曇・謝万二鎮敗、求自貶三等」とある。謝万が官職から退けられた升平3年は359年であるから、謝安が仕官したのは、謝安が40歳ないし41歳の359年もしくは360年頃のことであろう。
- 21 『晋書』巻65、王導附王珣(1756頁)、「(謝)安卒後、遷侍中、孝武深杖之。転輔国將軍・吳国内史、在郡為士庶所悦」。
- 22 『晋書』巻79、謝安(2081頁)、「襄陽既没、堅將彭超攻龍驤將軍戴蒨於彭城。玄率東莞太守高衡、後軍將軍何謙次於泗口、欲遣間使報蒨」、(2086頁)、「始從玄征伐者、何謙字恭子、東海人、戴蒨字安丘、処士達之弟、並驍果多権略。達厲操東山、而蒨以武勇顕。謝安嘗謂蒨曰『卿兄弟志業何殊』蒨曰『下官不堪其憂、家兄不改其樂』蒨以軍功封広信侯、位至大司農」。
- 23 『世説新語』雅量第六、34「戴公(戴逵)從東出、謝太傅(謝安)往看之。謝本輕戴、見、但与論琴書、戴既無吝色、而談琴書愈妙。謝悠然知其量」とあり、謝安と戴逵も面識があった。
- 24 中村圭爾『六朝江南地域史研究』(東京・汲古書院・2006年)の「第七章・六朝時期会稽郡の歴史的役割」に詳しい。会稽郡の山水の資源については、「(会稽郡)南部には会稽山脈・四明山脈があり、山地丘陵がひろがり、その間を流れる河川の沿岸に盆地が点在す

る。そこには豊かな山林資源があり、東晋以後、その資源の開発が盛んに行われた」(265頁)とある。

おわりに

以上、東晋南朝における、環境や風景、趣きとしての山水と、山水を舞台として活躍した知識人について、述べた。

第1章では、正史中にみえる「山水」の語の使用例から、正史の中に記された「山水」の表現内容を述べ、その表現内容が、南朝においてそれぞれどのような役割を担っていたのかを考察した。

「山の水」や「険しい地形」としての面が重視されていた環境としての「山水」が、東晋南朝からは、「山と水のある風景やその趣き」という面が重視されるようになった。その理由としては、南渡してきた西晋の知識人たちによって、山や水に囲まれた自然景観がより身近なものと認識されるようになり、同時に山と水のある風景としてのイメージが、従来存在した「山水」ということばを用いることで、はっきりと定着していったためと考えられる。

南朝において、山水が、風景 (landscape or scenery) と認識され、風景としての魅力を持つようになったことにより、山水は、詩や絵画などの芸術の題材や建築における造営の修飾としても用いられるようになった。環境としての山水が、情緒的に解釈され、文化として知識人たちに浸透していくことで、都市において、文芸・庭園・絵画などの分野で、山水がひとつのモチーフとして表現されるようになった。

第2章では、山水で活躍する代表的な知識人としてとらえられる「隠逸」とよばれる人々が、どのようにして政治権力と対立することなく、当時の社会において発言力や影響力を持つに至ったのかを考察した。

劉宋建国期、地方に対する新政権の懐柔策として、いくつかの政策が劉裕によってとられたが、郷里において人気の高い人物を、官に召し出すことはそのひとつであった。しかし、陶淵明のように、官職の必要性のなさから召し出しに応じない知識人も多く、為政者は彼らを「隠逸」と位置づけ、超俗的な有徳の士として評価し、また、同時に「隠逸」を辟召することで、統治者としての徳の高さを示した。隠逸は、政治を批判することなく、文化的素養の高かった西晋以来の有力一族に属する高官と交流し、それ以前の郷論の構造を変化させ、新たな価値観と文化を生み出した。

第3章では、東晋南朝の建康においてみられる山水庭園の造営と、その山水庭園の施主である知識人が、山水をどのような視点で観察し、自然風物のなかでも何を重視していたのか、という点を中心に考察した。

建康に移ってきた西晋の知識人の、山水をはじめとする自然風物に対する視点は、故郷を失った悲哀や愁いを表現するため、南渡してきた当初から有していたものであった。知識人の持つ、山水をはじめとする自然風物を情緒的に観察する視点は、山水に対する新しい見方を生み、山水庭園の造営の表現法に影響を及ぼした。

山水庭園は、華林園やそれに準ずるような大規模なものであれ、個人的な「小園」であ

れ、当時の文人が楽しむために自然を模して造営されたものであった。その造営の中には、「山」「水」「光」「風」が風景の要素として組み込まれており、風流や歓楽のためにも、これらと親しむことのできる環境は重要視されていたと考えられる。

同時に、風景の中にその趣きの本質的要素として、「山」「水」「光」「風」を見出したことによって、都市の庭園、詩文、絵画などの分野において、洗練された「山水」を再現・表現することが可能となり、山水文化の発展のきっかけになった。

第4章では、建康とつながりが深く、正史の隠逸伝にも多く登場する廬山の山水の実態について論じた。

廬山に存在した釈慧遠を中心とした仏教的結社である白蓮社は、僧だけでなく、隠逸や政府の高官など、当時の知識人が集まる場として機能しており、政治に関わる世間での評判、世論が存在していたと考えられ、その為、俗世間と切り離されて、実際の隠逸的山水が成立していたわけではない。

隠逸が、知識人に評価され、隠逸としての性格をより強めていく一方で、同様にまた、隠逸にとっての山水の役割も変化していったのであり、廬山の山水は、学問的な性格をもっていた山水から、隠れた逸材を国家に招くという、建国期にともなう政治権力からの需要をうけて、世間や都市の文化と切り離されることなく、隠逸的性格を持つ山と認識されるようになった。

第5章では、廬山と並んで山水の佳観で有名であり、当時の知識人に好まれた地である会稽の山水の実態について、論じた。

謝氏が会稽において別業を設け、土地の占有を展開して利益を得ていたように、王氏も会稽の上虞県を拠点のひとつとしており、王氏も、謝氏と同様に会稽において経済的活動を展開していたと考えられる。会稽の地に勢力をもつ有力な一族たちにとっては、山と水のある環境という面において、山水は重視すべき経済的基盤であり、一族の利益を守ることは重要な課題のひとつであったといえる。そして、そのような有力な一族たちの協力体制の一端が表出しているのが、隠逸たちの交流であった。

第5章で取り上げた、隠逸伝に名のある人物は、みな有力な一族の出身であり、そのため、彼らの一族の中には高い官職に就いているものも少なくない。これにより、山水における隠逸たちの交流のなかにも、官人がしばしば登場したのだと考えられる。

第1章から第5章を通して、東晋南朝の山水をテーマに論じた。その結果、この時期に山水が注目され、軍事や経済的な実利的な価値のほかに、情緒的な価値が見出され、文化的に大きな発展をとげたこと、またその過程において、中原の洗練された文化をもたらした、南渡してきた西晋の高官と、政治権力と無関係な立場をとり、超俗的・超越的な表現を重視した隠逸や僧が、重要な役割を果たしたことが明らかとなった。

ここにおいて、東晋南朝の時期、山水をめぐる文化が、現代の価値観とも共通する風流的山水の文化へと急速に展開した理由として、先行研究が指摘する点のほかに、新たに、以下の5点を挙げるができる。

(1) 故郷を失った悲哀や寂寥感が、西晋の有力一族出身の知識人たちを、南遷当初から山や河川をはじめとする自然風物に情緒的に注目させたこと。

(2) 建康やその陪都的性格をもつ長江沿いの大都市を、軍事的・経済的に、環境としての山水が支えていたと同時に、その山水を管理する知識人の往来によって、山水を主題とした文芸や表現が都市へ伝わり、文化的にも山水が都市を支える要素のひとつとなっていたこと。

(3) 皇帝を頂点とする政治権力の枠組みだけではとらえられない、官職につかない知識人の立場や価値観が為政者に認められ、「朝廷の士」と対的存在である「山林の士」が、知識人（高官・隠逸・僧）たちの交流のなかで、高官と同等の発言力や影響力を得たこと。

(4) 軍事的・経済的・文化的に重視された山水と直接関わった存在である知識人が、中国の伝統的に、高官であり、かつ、技術者であり、また文学者・芸術家でもあったこと。

(5) 晋の南遷にともない、中原の知識人が有していた皇帝を頂点とした価値観が動揺し、それと同時に、中原の知識人が、中央政権と一線を画した江南の知識人の生活様式や価値観に触れたことで、朝廷における栄禄や名誉を重視する価値観と対となる、山水における自然（ものごとの本性、本質）を重視する価値観が注目された。

これらの点に加わることにより、西洋における山水をめぐる文化の発展と比較して、中国において、時代的にも早く、またその経過においても短期間のうちに、洗練された山水文化が登場した理由を考察する足がかりとなることと思う。

都市の研究は、現在、発掘や史料の精読によって、飛躍的に進んでいる。しかし、都市を支える存在として、山水は、あらゆる分野で重要であり、また、都市と対になる概念として、都市と同様に根深い文化を有しているにも拘わらず、山水に関する歴史的な研究は、都市史と比較して、あまり重視されていないのが現状である。

山水の問題を論じるうえで、本稿ではほとんど言及することができなかった、北朝における環境としての山水および、山水文化の実態について考察を加えることは、南朝の山水と比較することによって、山水研究の精度を増すことができるだろう。また、仏教的な影響についても、研究を進める必要がある。江南の山水文化を研究するにあたり、山水をモチーフとした庭園や地形としての山水における建築の場面において、西域の影響が考えられる。また、図像の表現においても、西域やインドの美術と共通する点が多く見られた。これらについての関連に対する考証や、文献資料だけでなく、考古学資料や図像に残された資料を用いた研究を行うことも、今後の課題である。

表4 論文中で言及した山水庭園一覧

	庭園	造営された時代 (王朝名のあとの括弧内は、庭園の所有者の生没年)	場所	所有者	特徴
1	康僧淵の精舎	東晋(317-340)	会稽・予章	康僧淵	「旁連嶺、帶長川」。自然の地形に沿った造営。
2	東林寺	東晋(337-412)	廬山	釈慧遠、 (施主/桓尹)	香炉峰と瀑布を望む。自然の地形と植生を活かした造営。
3	蘭亭の庭園	東晋(303-361)	会稽・蘭亭	王羲之	自然の景観を活かした造詣。曲水を引く。
4	司馬道子の東第	東晋(364-402)	建康・東府城	司馬道子、 (施主/超牙)	「功用鉅万」「修飾太過」。水辺の酒家と船着場を造る。
5	戴顓の呉下の室	宋(378-441)	呉下	戴顓、 (施主/呉下士人)	「聚石引水、植林開澗」「有若自然」。
6	謝靈運の別業	宋(385-433)	会稽・始寧	謝靈運	「傍山帶江、尽幽居之美」。自然の地形を活かした幽玄な趣き。
7	劉宏の宅	宋文帝期(424-453)	建康・鷄籠山	劉宏、 (施主/宋文帝)	「尽山水之美」。
8	華林園	宋少帝期(422-424)	台城北	宋少帝	酒家を並べ、破岡埭を象った運河を造る。
9	徐湛之の室宇園	宋(410-453)	不詳	徐湛之	「貴遊莫及」。豪華な庭園。
10	顔師伯の園池第	宋(419-465)	建康	顔師伯	「冠絶当時」。豪華な庭園。
11	阮佃夫の宅舎園	宋(427-477)	建康か	阮佃夫	裝飾「宮掖不逮」。豪華な庭園。
12	華林園(改修)	宋元嘉22または23年(445,446)	台城北	宋文帝 (設計/張永)	山と水辺と建築から構成される。
13	玄圃苑(改修)	齊(458-493)	東宮内	文惠太子	「樓觀塔宇、多聚奇石、妙極山」
14	孔稚珪の宅	齊(447-501)	建康	孔稚珪	「盛賞山水」。草が伸び放題で、蛙が鳴いている。
15	芳林園	齊(502-519)	建康・青溪中橋近く	蕭偉	「窮極彫麗」。山と水辺があり、賓客が集まる。
16	沈約の東田の宅	梁(441-513)	建康・鍾山ふもとの東田	沈約	郊外の丘陵を望む場所。
17	徐勉の小園	梁(466-535)	建康・鍾山ふもとの東田	徐勉	情緒をかたむけるための庭園。郊外にあり、広々として静かな環境。
18	朱异一族の宅	梁(483-549)	建康・潮溝から青溪にかけて並ぶ	朱异一族	台と池の庭園。賓客が集まる。
19	湘東苑	梁武帝期(502-549)	台城内	湘東王(元帝)	山池、石洞を有する高山、凝った建築、軍事施設がある。華林園と共通点が多い。
20	華林園(改修)	梁武帝期(502-550)	台城北	梁武帝	重閣や高層建築を造る。
21	玄圃苑(改修)	梁(501-531)	東宮内	蕭統	穿築を加え、更に亭館を造る。「朝士名素」が集まる。
22	到漑の第居	梁(502-548)	建康・淮水近く	到漑	斎と山池と奇石がある。(奇石はのち武帝によって華林園へ移動)
23	張譏の宅	梁・陳(514-589)	建康	張譏	閑逸を慕う。山、池、花、果がある
24	孫瑒の宅	陳(516-587)	建康・青溪東大路北	孫瑒	「極林泉之致」「賓客填門」。
25	孫瑒の郢州の庭園	陳(516-588)	郢州	孫瑒	長江沿い。大舫がある。賓僚が集まる庭園。
26	陸瓊の園池室宇	陳(537-586)	不詳	陸瓊	「無所改作」。質素な園池。
27	華林園(改修)	陳武帝期(557-566)	台城北	陳武帝	政治的建築物を造る。
28	華林園(改修)	陳後主期(582-589)	台城北・華林園光昭殿前	陳後主	豪華な調度品と装飾、風と光を取り入れた文芸的な山水庭園。